支那覺え書

中央大學教授
法本義弘 著

東京
螢雪書院

0000667000

0000667-000

302.22-N9552s

支那覚え書

法本義弘・著

螢雪書院

1943

AAB

302.22
N952r

31288

自序

昭和五年、學校を出るとすぐ留學生となつて北京に渡つた。八年に歸朝してから後も、或は北支に、或は中支に、或は滿洲にと、屢々大陸に渡つた。特に玆數年の如きは、毎年必ず一回は大陸の土を踏む習慣にさへなつてゐる。

其の間、賴まれて新聞や雜誌に種んなものを書いたので、この十年間の切拔帳は數冊に及び、積んで山をなすに至つてゐる。

本書は、さうして著者が過去十年間に新聞雜誌に筆をとつたものゝ中から、支那に關する小論、隨筆の、比較的安易なよみ易いもののみを拾ひ集めたものである。

篇を分つこと三。其の第一の『滯支見聞控』は、帝國新報・大東文化・中央大學新聞・北京新聞のために書かれ、それぞれの紙上乃至誌上に發表したものである。

第二の『支那覺え書』は、昭和十三年、著者が「國民新聞」に携はつて論說の員に備はつて居つた當時のもので、主として「立言」或は「隨想」の欄に掲載したものである。他に「中央大學新聞」に掲載した二三が交つてゐる。

第三の『北京風聞雜記』の靑大人に關する記事は北京の邦字紙「新支那」のために、留學生覺え書は「文藝春秋」のために、日本婦人の話は「福井評論」のために、北京の學生の話は「中央大學々報」のために、それぞれ筆を執つたものである。

篇數にすれば長短合せて四十七篇。玉石同架と謂ふよりは、石石同架の憾なしとはしないが、それでも篇中の或るものは、著者にとつて棄てるに難いものがある。其の上に、大東亞戰爭完勝も、支那問題の解決を不問にしては語り得ないとする人人が、今更の如くに著者の言に聞きはじめてゐるのである。

此の時に當つて、四角張らぬ支那論、支那隨想を集めた本書の如きものがあつて、側面から支那に對する國民の關心を呼ばうとしても、强ち無駄事とも謂へまいと思ふ。そこへ螢雪書院から一書の出版をすゝめられたわけである。從つて本書の成冊は、ひとへに同書肆の勸說のたまものと謂つてよい。

唯、一言して置きたいのは、本書が『支那覺え書』と題して而も北京を中心とする北支の話材のみを以て編まれたことである。これは本書のために舊稿を整理中、中南支那に關する一著を別に編まうといふ野心が起つたことに起因してゐる。中支南支に材をとつた覺え書は、次の機會に讀者の前に送りたいと念じてゐる。

一言、本書成冊の由來を記して、以て序文に代へる次第である。

昭和十七年十二月一日

西郊井荻の靖獻書屋にて

著者

目次

滯支見聞控

在支外交官と支那……一
軍人と外交との話……一九
唐家の子供たち……三四
乞丐の居る風景……四六
現代を超越した人達……五二
房山旅行の挿話……五八
遙かに北京村を想ふ……六五

支那覺え書

日本通と支那通……七七
支那は戰場である……八〇
對支文化工作尙早論……八三
支那へ醫療班を送れ……八七
文化事業部への批難……九〇
文化協議會と文部省……九四
文化協議會と二次大會……九七
支那學者を呵る……一〇一
經濟開發の先決要件……一〇五
北支敎育機關の復活……一一一
日支兩國の語學敎育……一一四

日支結婚反對論……一一八
漢字廢止論の退却……一二一
對支工作の至難……一二四
支那の傳統を利用せよ……一二七
支那人を甘やかす勿れ……一三〇
日本第一、支那は第二……一三三
利するものは支那なり……一三六
北京に入りて……一三九
北支に入りて……一四二
山西炭の利用方法……一四五
石炭以外の北支物資……一五一
支那人の自尊性……一五四

目次

日章旗と支那人……一五七
日本婦人と支那語……一六一
支那人の殘虐性……一六四
徐鴻寶氏の逃亡……一六七
ハルビンの中學生……一七〇
第二世と其の親……一七四
或る客人のはなし……一七七
大陸經營の人材……一八二
支那の學問の話……一八六
西直門内の人柴五郎……一九二
布子着た支那の兵士……一九八
日支同文ものがたり……二〇四

北京風聞雜記

村に歸へる青大人……二一一
村に歸つた青大人……二三五
北京留學生覺え書……二五五
或る日本婦人の話……二七三
北京の學生達の話……三〇五

滯支見聞控

在支外交官と支那

「副島以後、日本の外交官に人なし」

とは、北京に在る故老達が今日に至つてもなほ追懐して言ふ所である。

副島とは言ふまでもない蒼海副島種臣先生のことである。副島蒼海先生の大人傑たりしは周く人の知る所で、今更北京の故老達によつて呶々される迄もないことである。

然らば、其の副島先生以後、日本の支那に送つた使臣に人がなかつたのか——といふと、強ちさうとは謂へないものがあり、歴代使臣、何れも勝れた人達であつたと、私は信じてゐるのである。

然るに、北京に今も居る支那人の古い人達は、いちにんの副島先生の尊敬すべき

を知つて、爾餘の歴代使臣のことに及ばないのは何故かと、訊いてみて、私には成る程と思ひ當るものがあつた。

それは何故かといふと、

「副島には學問があつたが、いまどきの日本の使臣には學問がない」

といふ彼等の觀察は、殆んど彼等にとつては信念と化してゐるもの、如くであつて、容易に之を飜さうとしないからである。

彼等のいふ「學問」とは、國學――卽ち漢學のことを言ふのである。此の漢學の素養なき者は尊敬するに足らず――とする彼等にとつて、如何に歐米の學問に於て高い教養を持つ者と雖も、彼等に尊敬を期待することは出來ない――としても、これは全く已むを得ない當然とでも謂ふべきであらう。

此の事の是非は、此の場合問題にはならぬ。問題となるのは、相手國の國民から尊敬されないやうな使臣は、恐らく其の駐在國で仕事が出來ないといふことである。

そこで飜つて、わが國歴代の對支外交を省みて見ると、其の成敗の歴然たるものがあつて、思はず私どもをして慄然たらしめる。

支那に來てゐる外國人は、大抵その專門以外に趣味を持つてゐて、その趣味がまた專門學者の域にまで進んだ研究を遂げてゐる。

所で、こゝにいふ趣味といふのは、在支日本人の中で、謠曲や長唄や尺八の會があり、短歌や俳句の會がある――といつた種類の趣味を指すのではない。

右の如き、謠曲や長唄等は、趣味は趣味でも、別に支那に來てやらねばならぬものではないからである。

從つて、此處に言ふ趣味も、支那に來たからこそ――といふことを前提とした趣味を指したものであることは、言を俟たない所である。

私は僅かながらも四ヶ年に亘る支那留學中に、尠からぬ歐米人に接した。中には

大學教授や、支那學者やといつた、特に支那を對象とした研究者もあつたが、其の多くは外交官や實業家といつた人達、並びに宗教家達であつた。此の人達が殆んど例外なきまでに、支那の土俗や、文化や、法律や、制度や、社會や、經濟やといつた、それ〴〵自分が携はる專門外の分野に於いて、立派な一家を成して居つたことは、今もつて忘れることの出來ない點である。

近い話が、景教服飾品として、わが佐伯好郎博士や、ペリオ博士や、羅振玉氏等の間で、世界學界の謎とされてゐる「青銅十字章」の蒐集家は實業家であつたし、過去三十年を孜々として之が編纂に努め、とう〳〵立派な蒙古語辭典を完成したのはフランスの神父であつたし、支那美術解說の著者は法律顧問であつたし、古代史研究家は銀行員であつたことを擧げたい。

私共が研究所として種々の便宜を蒙りつゞけた東方文化事業總委員會の圖書館の書庫に現はれる者は、之が管理者たる日本公使館員ではなくして、いづれも英米や獨佛の外交官や實業家といつた、所謂在支歐米人であつたことの、何といふ皮肉であつたことか。

私共の圖書館へ支那の版本のことを聞くために、わざ〳〵天津からやつて來た外國人を私は幾たりか知つてゐる。

斯んな風で、苟くも支那に來る外國人は、東洋の事に關し、一通りの學問的常識を持つて居り、相當の研究を續けて居る者が多いと思はれる。

然るに翻つて、わが在支同胞の態度を見るとき、上は外交官諸公から、下は一般居留民に至るまで、殆んど總ての人達が、支那そのものに就てさへ、研究を怠つてゐる甚しい事實に遭遇する。

支那そのものゝ研究なしに、支那發展を企圖することの如何に無謀なるかに關しては、之を論ずるに人が有らうから、これはこゝに論ぜぬことにしても、特に支那を知り、支那を理解せねばならぬ立場にある在支外交官の懶惰とも極言すべき不勉

強さは、實に私共をして慄然たらしめざるを得ぬものがある。

成程、これでは日本の對支外交が、外國のそれに比して、振はないのも無理はないと思はしめられることがあらうかと思つて、左に私自身が見聞した「在支外交官と支那」に關する挿話を御紹介しようと思ふ。

人名を省略したのは、その人が何れも現存の人であり、今もなほ現職に在られる人々なるが故に、支那式に言へば、「その人達の面子のために」といふ、筆者の思ひやりに出づるのである。

明の永樂元年（一四〇三年）に北京と名付けられた北平特別市（支那事變で再び北京といふ名に戻つた）が、民國十八年（一九二九年）に政府所在地でなくなり、同時に「北京」から「北平」に改められるに至つたことは、萬人既知の事實であり、この「北平」といふ地名が、民國十八年に突然新造された名稱ではなくして、前記の永樂元年以前、即ち明の洪武初年（一三七四年）頃、「北平府」といはれたことに發することも亦、衆知の事實であるが、此の民國十八年に、北京に居合せたわが公使館員の中には、

「北伐が平定したので、北伐の北と、平定の平とを採つて北平といふのである」

といふ棒腹すべき解釋を下して得々たる物識り先生があつたさうである。

これは、支那が共和國になつた當時、進士上りの老支那人が、

「南北共和、仍で共和國といふ」

と心得て居つたといふ話と共に、ナンセンスの双璧をなすものだとして、今でも笑ひ話になつてゐる。

さうかと思ふと、日本留學生の會を、公使館が斡旋してこしらへたとき、幹事の留學生が、其の會名を「大興學會」と名つけた理由を、某書記官の招待宴で說明披

露に及んだことがある。

「この大興といふのは、遼の時代に此の北京の都を大興と名付けた時代がありまし
た、これに因んで、本會の名を大興學會と致しました」

これを聞いた某書記官以下、外交官諸公等しく膝を叩いて言つた。

「成る程、さういふことになると、學者諸君でないと分らない」

そして三歎之を久しうしたものである。

所で、此の「大興」といふのは、遼の時代の都の名ではなくて、金の貞元四年（正
隆元年）（一一五三年）の府名で、遼代に置かれた宛平、析津の二縣名の一、析津縣
を改めて大興縣と名つけて今日に至つてゐることは、苟くも在北京の人間には常識
になつてゐる。

それを、外交官諸公だけは知らないと多寡をくゝつて、年代に於て一世紀半、王
朝の名前まで取り違へた故事來歴を語り聞かせて、感じ入らせた幹事のF——君も、
まあ何と呆れた人の悪い男だらうと思ふのであるが、それにしても、うま〳〵と感
歎させられた外交官諸公の無智識にも呆れたものではないかと、これは專らの噂で
あつた。

北京の北城、府學胡同、昔の柴市の跡といつては分るまいが、彼の宋末の忠臣文
天祥刑死の跡であり、現在もなほ文天祥の祠堂が遺つてゐる。

その祠堂には、有名な雲麾將軍の斷碑と、文天祥像の石碑があり、兩つながら從
前は自由に拓本をとることが出來たのであるが、此の祠堂が市政府の管理の下に置
かれると同時に國寶扱ひとなり、拓本をとることを許さなくなつてしまつた。

所が、或る必要があつて、此の文天祥像の拓本が如何しても欲しかつた筆者は、
すゝめて呉れる外交官もあつて、公使館から市政府に交渉して貰つて、いはゞ日本
政府の名によつて拓本をとらして貰はうといふことにまで漕ぎつけたのである。

斯くて、いよ〳〵其の交渉のために人を派遣するから、貴君も一緒に市政府まで行け――といふ電話を公使館から貰つた筆者の喜びは譬へんにものなく、當日を待ちかねて公使館まで罷り出ると、

「私が其の交渉に參りますから……」

といつて出て來た髯の濃い四十男の外交官氏が、卒然として筆者に聞いた。

「時に、その文天祥といふ人は、いま市政府で何をしてゐる人ですか」

「？……？……」

「あらかじめ豫備智識を持つてゆかぬと、交渉するに不便ですからねえ」

朗らかなのも程にこそよれ、無智識も程にこそよれ。こゝまで徹底した人間を外交官として支那に派遣して置かねばならぬ祖國日本を想つて、筆者は暫し悵然としたことであつた。

尤も此の交渉は、如何しても物にならず、筆者は歸朝後、時の故宮博物院理事長徐森玉先生の好意で、漸く手に入れることが出來、今日も之を書齋の壁間に懸けて、日毎文天祥の忠節を偲び、徐先生の好意を謝してゐる者であるが、それにしても、斯うした外交官を支那に置いて、而も對支外交の能率をあげようといふのは、恐らくあげようといふ方が無理といふものではないであらうか。

邊幅を飾らぬこと、、國史科か國文科か、兎に角外交官には稀らしい日本的學問をした人として、學德共に外務省に其の人ありといはれ、後年ドイツのハンブルグで輪禍のために非業の最後を遂げ、いまだに惜しまれてゐる總領事江戸千太郎氏が、文化事業部の第一課長であつた當時、公務を帶びて北京にやつて來たことがある。

其の時、日支兩國の文化人が集まつて、江戸氏の歡迎會が開かれた其の席上、或る支那の學者が、楊守敬が支那に亡んで日本にのみ存する書籍を持ち歸つて「古逸叢書」を作つた――といふ話をした。

そこで江戸氏は、支那語に巧みなことを以て名のある某外交官を顧みて、通譯をうながした。

言ふまでもない事ながら、支那人間の習慣によると、他人の名を呼ばずして字を呼ぶのを禮とする。從つて此の支那人も亦、楊守敬の名である守敬をいはずして、字の「星悟」といつたものである。

席を同じうする數十名の日本側の文化人達が聞き耳を立てゝゐるとき、その外交官氏は、

「日本へ行つてゐたその支那人が、その澤山の本を持つて戻つて、その本を作つたのです」

と、どの支那人だか、どの本だか、勿論楊守敬のことなんか、まるで分らなかつたらしいのである。ぢつと此の名譯を聞いてゐた支那人氏は、

「楊星悟といふのは、楊守敬のことです」

と附け加へたが、外交官氏、聞えぬふりをして澄まし込んで居つた。

斯うした外交官の支那語で、いくら外交々渉がまとまぬからといつて、やつきになつても、それはなる方が無理といふものであらう。

「教養のない人間は、いつくら言葉が上手だといつても、相手の話す話の內容が分らないのだから駄目さ。さうなると……」

口さがない在北京の留學生達は、此の時以來支那語に限らず、語學といふものをすつかり輕蔑し、

「言葉なんてものは、畢竟するに料理をのせる皿みたいなもので、肝腎なのは料理なのだからね」

などゝいつて、支那語の拙いのが却つて自慢になるといつた惡風潮をさへ生んだことである。

筆者から此の話を聞いたのは、今は轉じて某國の總領事か何かになつてゐる外交官の某氏で、

「いくら語學に堪能な外交官でも、そんな專門的なことは分らぬのが當然ぢやないか」

といつて、同僚を辯護したものである。そこで筆者は言つた。

「だつて楊守敬は、日支外交史上、李鴻章に次ぐ大きな足跡を殘してゐる、支那の外交官ぢや大先輩ともいふべき人だぜ。專門といへば、君達こそ專門家ぢやないかい」

此の外交官某氏は、嘗て支那の某地で總領事してゐた頃、ある人から「樂浪の出土品」の寫眞を見せられ、そこは外交官だけに、何とかほめなくてはなるまい……と考へたらしい、

「あゝ成る程、音樂の波といふものは綺麗なものですなあ」

と、感に堪へぬものゝ如くに言つたといふ珍談——落語のやうだが正眞正銘の實話の主人公である。

其の他、支那人から宴會に招かれて、招び返しの宴會をしなかつたばつかりに、支那駐在中、支那側要人から相手にされなかつた外交官や、訪問していつて主人から茶をすゝめられたのはよいが、主人が茶碗を持ち上げても茶を口にしないのは、茶を飲む暇もないから早く歸つて呉れといふ合圖、いはば日本で箒を立てる樣なものとは知らず、悠々二時間も頑張つたばつかりに、爾後いくら訪問しても、面會謝絶を喰つたといつた風な、在支外交官の支那を知らない例話を拾つて居れば、恐らく際限があるまいと思ふ。

讀む人、この拙文に捧腹し、筆者を市井の笑話作家と輕蔑したまはんは勝手である。

さりながら、一國の現狀を洞察し、其の眞の姿を把握するには、其の國の歷史を極める以外に方策なしとする歷史家の世界的定義に、我田引水以外の意義を發見し得る程の人ならば、筆者の本志の那邊に存するかを知らるゝであらう。

希くは、斯うした戯れ文によつて、酒色と麻雀以外、殆んど何の爲すなき在支外交官の多くの、驚くべき不勉强さと、祖國日本に益なきに慨する筆者の、一片皎々の憂憤を憐れめ。

（八・六・二一）

軍人と外交との話

事の是非善惡は言ふまい。唯一つの事實をあげる。それは外でもない、あの滿洲事變の當時、南滿・南支に於けるわが居留民達によつて、「領事館不要」の決議が行はれ、軍の機關さへあつて呉れゝば、領事館の如きは必要としないといふ主張が澎湃として起つたことである。

極端な論者になると、「同胞の海外發展を阻害してやまぬものは、却つて我が出先外交官なり」とまで極言して憚るところが無かつた。

果してさうか。筆者は實はこゝで其の議論をしようとは思はない。たゞ、最近市井に行はれる「外交も軍にまかせた方がよからう」などゝいふ外交官輕視の蜚語が、まん更の皮肉でもないことを知らされることがあるので、北京留學中の見聞の中か

ら、二三の挿話を拾つてみようと思ふだけである。

昭和六年九月十八日。柳條溝に轟いた支那側の不法なる爆破に、久しい間の堪忍袋の緒も遂に切れて、起ち上つた皇軍。斯うして滿洲事變は勃發したのであつたが、事變勃發にスワコソとばかりに關東軍司令部に駈け集まつた各國記者團の中にアメリカ人記者の一團があつた。

一室に通されたアメリカ人記者團の前に、美事な林檎を山と盛つた大きな鉢が出されてあつた。

やがて之が應接に出て來た副官は、記者連が大事件勃發に興奮してゐるのを無視したもの丶如く、靜かに一同に林檎をすゝめた。そして徐ろに口をきつて、

「この林檎は、わが滿洲移民によつて栽培せられたものである」

恐らく、圖放もないことを言ふ副官だと思つたのであらう、アメリカ人記者連はいづれも碧い眼をパチ〳〵させた。

けれども副官は、もとよりそんな事は意にも介せず、悠々として語をついだ。

「かつて貴國では、わが國の移民を排斥した。その當時、貴國の朝野を擧げていつたことは、日本には近くに滿洲といふ廣大な土地があるのに、何が故に我が國へのみ移民を送つて來るか……といふことであつた。斯くてわが國の移民は貴國を逐はれた。そこで彼等は貴國で覺えた林檎栽培を、此の滿洲の土地で試みるべく、この地に移り住んだのである。その林檎が、もう斯んな實を結ぶやうになつたのである。まあ、一つ試食して呉れ給へ。諸君も知つてゐる此の荒涼果てなき曠野を開拓して、斯うした實を結ばせるまでの、わが移民の勞苦は……」

此のアメリカ人記者團との會見に於ける、副官の勝利は申すまでもない。事の實否は知らぬ。けれども、まさに當意卽妙の智である。

筆者は、此の副官の姓名を失念してしまつたことを、今日に至るも限りなき遺恨

事としてゐる。

昭和五年のことであつたと思ふ。北京では日本軍隊の「越境演習問題」が起つて、種々の論議が行はれた。

これは、北清事件で駐兵權を持つた各國が、支那主權の及ばぬ「東交民巷」といふ公使館區域につゞいた廣場を練兵場にしてゐたのであるが、ある時、日本の歩兵隊の演習をやつて、兵隊が「長安街」と呼ぶ區域外の大通りの道路にまで出て來たそれが怪しからぬ――といふのが支那側から出た抗議で、國際的な物議の種とまでなつた問題であつた。

日本公使館も仲に這入つて、種々研究した結果、公使館區域や練兵場の外を東西に走つてゐる所の、問題の「長安街」なる大通りは、元をたゞせば公使館區域の一部分を支那側に使用させてやつてゐるものである――ことが、古い地圖や、當時の記錄によつて明かにされ、問題は手もなく支那側の敗北に歸して片付いてしまつたのである。――當時、張學良が陸海空軍副司令として頑張つてゐた北京では、よく斯んな無理難題を持ちかけ、云ひがゝりをつけて來たことである。

恰度、此の問題解決の直後に赴任して來た隊長に、A――といふ中佐があつた。A――中佐が此の問題のことを知らぬ筈はないのに、平氣でどん〴〵長安街の街頭にわたつて演習をやらせるので、時が時でもあるので、公使館あたりではハラ〳〵してゐるといふ專らの噂であつた。

ところが當のA――中佐は、一日人に語つて、

「駐兵權を持つてゐるからには、どこで練兵をしようと、支那人側の迷惑を考慮して、非常識なことさへやらなけりや、構はない筈ではないか。自分も北京へ赴任するに當つて當時の條約を調べてみたが、越境がどうのこうのといつた事柄は、何も書いてないんだよ……」

果して其の後、支那側からは、何の文句も出なかつたらしい。

斯うなると、日支條約を研究してゐるのは新任の歩兵隊長で、長く駐在してゐる外交官諸公ではない……といふ結論になるといつて、一時は口さがない北京童の噂とりどりであつた。

北京に在る各國駐屯軍の中で、アメリカの隊長が一番古參であつた。此のアメリカの隊長が、各國の隊長に宛てゝ回章を廻したことがある。その文面に、

「爾後、何國の軍隊といはず、凡て公使館區域を出る時には、之を一週間前に、互ひに通告し合ふことに致したい」

相手が今もいふ各國隊長中の最古參で、而もアメリカの隊長である。各國隊長に異議のある筈はなく、いづれも「至極御同感」であつた。

ところがひとり、毅然として反對を言ひ切つた隊長があつた。日本の隊長A——中佐である。その返書に曰く、

「御趣旨は誠に同感であつて、我が軍に於いては從前と雖も、然致し居ることは御承知の如くである。然し乍ら、自己營庭内に於いて練兵をなす程の廣大なる土地を持たざる本軍に於ては、各國軍隊とは事情を異にし、公使區域を出でざれば練兵をなし能はぬ事情にあるを以て、一々之を一週間前に通知する義務を負ふとなつては、之が煩に堪えざるものがある。本軍に於いては、出來得る限り、將來と雖も通知をなす心算なれども、之が義務を負ふことは、右の理由により同意致し難し」

各國駐屯軍の隊長が一目おいてゐるアメリカの隊長を相手に、新參のわが隊長の何といふ堂々たる態度であつたことか。筆者は『論語』を讀んで、「以テ百里ノ命ヲ寄スベシ」といふ句に出會ふ毎に、A——中佐（今は閣下になつて居られる）の、颯爽たる風丰が先づ眼前に髣髴するのである。

張學良によつて企てられた、わが國に對する嫌がらせは、昭和六年の春頃から、殆んど頂點に達して居つたが、其の一つの現はれが、日本軍に對する發火演習通告問題であつた。

これは、日本軍が發火演習をやる場合、前以て支那側の公安局に通告を發することになつて居つたが、この年あたりになると、斯うした通告毎に、公安局側から酢だの蒟蒻だのと言つて、演習實施の延期を申し込んで來るのであつた。

或る時、斯うした支那側のあの手此の手に、とう〳〵腹を立てた隊長は憤然として、而も徐ろに

「念のために言つて置くが、通告といふのは相談ぢやないんだよ」

これを聞いた公安局側からは、もう直接何も言つて來なくなつた。その代り、今度は手を變へ、公使館を通じて種んなことを申し込んで來る樣になつた。

滿洲事變が起つた直後のことである。日本軍の夜間演習が、東交民巷の外の練兵場で行はれたとき、公安局から早速公使館へあてて、之が取り止め方を交渉して來た。

公使館からは、隊長A――中佐に對して、右の申し入れを傳へ、恐らくは「人心動搖の恐れあるを以て……」位のことは言つたのであらうと思ふ。

この時、隊長すこしも騷がず、

「何を言はれるか。自分の國の練兵場で自分の國の兵の練兵をするのに、何の遠慮が要らうや。すて〻置きなさいよ」、

長く北京に住む、所謂「老北京」と呼ばれる支那通達は、この話を洩れ聞くや「新任隊長は對支外交の要諦を知つとる」とばかりに、いづれも手を拍いたことである。

滿洲事變が起ると、北京の日本駐屯軍の行動は、それが各國公使館の所在地であ

るだけに、各國人注視の中におかれてあつた。

それは、もう冬に入つた或る寒い晩、例によつて日本の練兵場で夜間演習が行はれたときのことである。眞夜中であるに拘らず馬を飛ばせて駈けつけて來たのは、外ならぬイギリス駐屯軍の隊長であつた。

「ヤア」「ヤア、なかなかやつてゐるね」位の挨拶があつて、わがA——隊長と、イギリスの隊長とが、馬首を並べてさり氣なく話をした、世間話をである。

しかし、イギリスの隊長ともあらう者が、何も醉興で深夜に馬を飛ばせて、わざ〳〵世間話をしに來たのでないことは分つて居た。

果して、イギリス隊長は、さり氣なく本題に這入つた。

「時に、貴官は此の夜間演習をやめる氣はないか」

「それはまた何故であるか」

「滿洲事變は貴國軍隊の夜間演習に發したものである。特に此の際、當地に於いて貴國軍隊が夜間演習をやるといふことは、危險な結果を生じはせぬかと、人々は恐れてゐるのである」

「貴官は、滿洲事變が我が國軍隊の夜間演習に端を發したといふ支那側のデマを信ずる者であるか」

「否、否。本官はさうではない。けれども、多くの人々は左樣了解してゐるもの、如くである」

「それは大なる誤解である。そも〳〵滿洲事變といふものは……」

といふわけで、嘗て駐在武官としてアメリカに在り、英語の巧みなA——隊長は、滔々として、平和を欲する日本が、如何に已み難くして銃を執らねばならなかつたかを說いた。

「本官は其の事に就いては了解した。しかし、此の場合、此の夜間演習を中止されることは最も良いことであると思ふ」

「それは何故であるか」

「本官は、貴官の言はるゝ如く貴國軍隊の公正を信ずるものであるが、しかし、此の夜間演習を見て支那市民は恐らく不快の念を抱くことであらう。斯かる時局の際、殊更に支那市民を不快にさせることは、極力之を避けるべきではないか」

「本官の考へは、さうではない。本官が兵の教練をなす時には、支那側の快不快の如きは、更に問題としないのである。支那人の快不快を問題にするならば、我我は條約による駐兵權によつて軍隊を此の土地に駐めることすら避けなければなるまい。事實支那市民は、我々が此の土地に駐屯してゐることに對し、限りない不快と反感とを持つてゐるであらう。けれども本官は、それを意としないのである。若し貴官が、今の言の如く支那市民の不快反感を恐れるならば、貴官は其の部下を率ゐて直ちに本國に歸つては如何か」

「……」

これが、恰も天氣具合を話すやうにして取り交された日英兩國隊長の、その夜の會話であつた。軍人亦外交官あり、ではないか。

北京天津間の軍用電話の、北京の城壁を通つてゐる部分の電線かけ換への爲に、二名の日本兵が城壁に登らうとすると、公安局の巡警が之を止めて登らせない。すつたもんだの擧句、日本兵は一時間も遲れてから、城壁に登つたのであるが、その翌朝、公安局長の旨を以て、支那側の使者がA——隊長を訪ねて來た。その口上に、

「昨日は部下巡警の思はぬ行き違ひによつて、貴國兵士を隨分長らくお待たせ致した由にて、誠に申譯なかつた。今後は右樣のことのないやうに、充分氣をつけさせるつもりであるから、何卒御容赦にあづかりたい。就いては、昨日のやうなことのないやうにするため、今後、貴國軍隊が城壁に上られる際には、前以て御通知下さるやう御約束ぬがひたい」

之を聞いた隊長は言下に言つた。

「何を言ふか。本官は左様な外交交渉には斷じて應じ難い」

「外交交渉ではありません」

「外交交渉でなくて何か。過去より現在へかけて、條約によつて自由に登ることの出來た城壁に、今後は一應の通知を要するといふが如き約束は、本官に於いては斷じて應じ難い所である。足下は歸つて公安局長に告げよ。日本軍の軍服を着して外出したる場合、たとひ一人の兵に對する時と雖も、之が行動を阻止するが如きことなきやう、嚴重に部下に申達されたし。何とならば、わが軍に於いては、何れの兵も皆實彈を所持し、任務遂行を阻碍されたる時には、何時にても使用して差支なき旨を申し含めてあるからである。昨日の事は、貴方の巡警にとつては僥倖であつたに過ぎぬ。と言ふのは、我が軍の兵は、該地點に於いて他の兵の到着を待ち合せてゐたが故に、待つてやるの時間的餘裕を持つてゐたのである。あれが若し、緊急を要する場合であれば、該巡警に對して我が兵は武力行使の已むなき處置に出たであらう。實に危い所であつた」

まことに、A——隊長が此の時うつかり、左様か、然らば今後は電話でもかけさせることにしよう……くらゐの挨拶をしたとすれば、それこそ今まで自由に登れた城壁へ、勝手に登れないやうな結果になつたであらう。

唐家の子供達

打倒日本帝國主義――唐家に寄寓するやうになつてから、初めて支那人の口から此の言葉を聞きました。

それまでは、たゞ街の大通りや、城樓の壁などに、此の八文字が大書されてあるのを見て、（いま〳〵しいチャンコロ奴が！）と思つてゐたゞけでした。

尤もそれまでにだつて、支那人の口から聞かせられてゐたに相違ないのですが、何しろこちらに言葉が通じないために、聞かないのと同じ結果になつたのだらうと思ふのです。さう考へると、言葉の通じなかつた當時が口惜しくてなりません。

唐家は、主人の唐さんが被服廠のお役人の中でも顔の利いた、相當に羽振りのよい人なので、其の家庭も中流以上、院子（にはこ）の六つもある邸宅ですから、普通の支那人

の家と違つて便所などもある家です。

私の屋子（へや）から此の便所へゆくのに、どうしても通らねばならぬのが、唐家の子供部屋の前なのです。

唐家には五人の子供が居て、其の子供達が、私が部屋の前を通るたびに、何時も待ちかまへてゐたやうにして、口を揃へて大聲でわめくのです。何か私のことを言つて居るには相違ないのですが、そこが言葉が判らない悲しさに、問ひ返すことも出來ず、默つて知らぬ顔をしてゐました。

けれども、次第に言葉が判つて來るにつれて、彼等の言つてゐるのが、「打倒日本帝國主義」だの、「小日本喝凉水」（小さい日本人の冷水のみ）といふ言葉だと知つた時の、癪にさわつたことといつたらありません。

そこで私も、（たとひ子供の言ふことだつて、何だつて……）一度とつ捕まへて……

……と考へてゐたのです。

ところが、ある日。それは恰度よいお天氣の日曜日でしたが、五人の子供達がそれ〴〵自分達の作つた紙の旗を持つて、ワイ〳〵言ひ乍ら、院子から院子へ行進をつゞけてゐるのです。

ふと覗いてみると、其の紙の旗には、みんなそれ〴〵「打倒日本」と書いてあるのです。院子へ出てみると、柱や壁の到る處に「打倒日本」と書いた色紙が貼りつけてあります。

つまり子供達は、斯うして言はゞ「打倒日本ごつこ」をして、遊んで居つたのです。

下の女の子と、男の子は、まだ學校へ行つて居ないので、上の三人が學校へ行つてゐる間は、ぼんやりと院子の一隅にうづくまつて、空を見てゐます。

全く、見てゐると、半日位はぢッとさうしてゐて、子供のくせに「悠々見南山」の面影があります。こんなことは、日本の子供には斷じて見られないと思ひます。

私が、唐家の子供達の中で、一番さきに仲よしになつたのは、下の此の二人です。

女の子が「勉治」といつて、日本でならば男の子のやうな名で、男の子は、名前をきいたら、

「ぼくン名は小牛だい」

と答へました。

「小牛？　隨分變な名前だな、お前の名は」

といふと、

「本當は、外に名前があるのだけれど、あたし達がみんなで付けてやつたのよ、だから小牛なの、此の子は」

と、女の子が代つて説明をしました。

「F――先生、此の字を何と讀むか知つてる？」

さういつた女の子は、地面へ「打倒日本」と書きました。

「打倒日本ぢやないか。でも、此の下の二字は、どうして横に書くんだい」

「あら、だつて、打倒しちやつたんですもの」

「誰に一體こんな事を教はるんだい」

「お兄ちやんや、お姉ちやんにだわ。だつてお兄ちやんも、お姉ちやんも、學校で教はんのよ。あたしも、來年學校へ行くやうになつたら、教はんのよ。もつと外のことだつて……」

「外のことつて何だい」

「どつさり有るわ。中國領土は日本の何倍ありますか——だの、中國の敵は何國ですか——だの、いろんなことよ」

みんな學校で教はるのです。道理で此の間も、二番目の男の子が

「F——先生、中國はお前の國の何倍あるか知つてるかい」

と、こましやくれたことをいつて、私をいまいましくさせたことであると、此の時になつて思ひ當る所がありました。

斯んな事が有りました。日本公使館につとめてゐる友人のY——君が、私のところへ遊びに來た時です。ちやうど私の所に居合せた六つになる男の子が

「爾姓甚麼」（お名前は）

といつてきいたのには、流石のY——君も、私も吃驚しました。そればかりか、御郷里は、御職業は——などゝ、つゞけさまに聞くのですから、Y——君も私も、開いた口がふさがらず、暫し呆然たらざるを得ませんでした。

北京に古いA——さんといふ人の所で、此の話をしたところが、A——さんから斯んな話を聞かされました。

A——さんが、ある回教徒の子供を連れて、回教徒でない支那人の宅へ遊びに行

うた時のことです。慣例に從つて、其の家でお茶を出されました。

勿論、其の子供にもお茶が出ました。所が御承知のやうに、回教徒の間では火のちがふ、つまり同じ信徒でない異教徒の家で煮炊きしたものは、たとひ子供であつてもそれを口にしてはならないといふ鐵則があります。

お茶をすゝめてから、此の事に氣付いた主人が、ハッとして其の子供に、

「これは差し上げてはいけなかつたのですね」

といふと、其の子供はすぐに、

「這是敝教的短處――これは私共の宗教の短處でございます――」

といつて、椅子をはなれて立ち上ると、叩頭をしたのださうです。其の子供は、其の時何でも九歳か十歳であつたといひます。

唐家に寄寓して、唐家の子供達の言つたり仕たりしてゐることを見てゐるうちに、私は「支那の子供は、子供といふよりは小さな大人だ」といふ風に考へるやうになりました。子供らしい所がないからです。

唐家の子供達は、毎日伯父さんに當る主人の唐さんから小遣として銅貨五六枚（日本の二三錢）を貰ひます。

子供達は、其の銅貨で、あめ玉や、串にさした棗を買ひます。

子供達相手の菓子屋や果物屋が、いつも決つた時間に門口へ來て大聲で呼びますから、子供達は奥から門口へ出て行つて、思ひ〳〵に好きなものを買ふのです。

「このあめ玉いくら」

「二つで一錢」

「二つ一錢なんて高すぎるよ、三つ一錢にしろよ」

「そりや駄目です、元値がきれます」

「ぢや、お前のは買はないから、あつちへ行きなよ」

「ぢや、どうです坊ちやん、五つ二錢なら」

斯んなことで、わい〳〵騒いで、結局は二つ一錢のあめ王を、五つ二錢で買ふのですが、その懸け引のうまいこと、大人の支那人と同じことです。

それが未だ學校へも上らない五つや六つの子供なんですから、全くの話が、末恐しいではありませんか。

正月まへになると、子供達はそれ〴〵小遣ひをためはじめました。

「あたしはもう五十錢たまつたわ」

「あたしは四十五錢だわ」

「ぼかア、七十錢だ。こないだ李家の小母さんが來た時、十錢もらつたから」

「小牛の奴ア、十二錢さりよりないんだよ、あの子は毎日買ひ喰ひばかりしてるからなんだ」

さう言つてゐた子供達の小遣は、更に年末に貰ふ特別の小遣ひ錢と合せて、大晦日の晩にあげる爆竹代になります。

滿洲事變後は、公安局から差し止められましたが、それまでは、毎年大晦日の晩には、徹宵爆竹があげられ、それが方々であげられるので、殆んど一睡も出來ませんでした。

けれども、これは子供が自分であげるのではなくて、唐家の子供達のは、何れもボーイにあげさせて、自分達は院子(には)に出て見てゐるのです。こゝらあたりも、日本の子供達とは趣を異にしてゐるやうに思ひます。

けれども、子供達はいゝ氣なもので、

「今度は俺のだぜ」

とか、

「こんどは、あたしのをあげてお呉れよ」

とかいつて、バーンと打ちあげられ、スーッと火を引いて、凍り切つた夜空に消える爆竹に、それ〴〵手を打つては、喜んで歡聲をあげてゐました。

やつぱり唐家に寄寓して、私と一緒に住んでゐた人に、京都大學のY——君といふ人があります。

此のY——君が留學滿期となつて歸朝する時のことです。同君が可愛がつて飼つてゐた蒙古種の仔猫を、子供達は欲しいと思ひました。

子供達は、みんなで相談すると、ある晩御飯の時に、主人の唐さんに此の事を申し出ました。

「お晝はみんなで喰べさせるから、晩は伯父さんが喰べさせて下さい」

とう〳〵唐さんに承知させると、子供達は大喜びで、Y——君が殘して行つた仔猫を飼ひました。

約束通り、晝は自分達の食物を少しづゝ集めて、之を猫に喰はせ、晩は料理部屋からいろんな食物の殘りを持つて來させて……。仔猫はまる〳〵と太つて大きくなりました。

私は此の猫を見るたびに考へるのですが、日本の子供達だつたら、あんな時に一體どうするでせうか。

恐らく大人の思惑や、食物のことなど、少しも考へることなく、欲しかつたら直ぐに貰つて來て飼ひ初めるだらうと思ひます。

それをしない所に、唐家の子供達の支那の子供である所以も、私が此の子供達に「子供」を見ないで、小さいけれ共「大人」を見る所以もあるのです。

乞丐の居る風景

支那語で乞丐のことを「花子（ホウツ）」といひます。文字にすれば、日本のさしづめ可愛い女の子か、さうでなくともラジオの子供の時間の「さようなら、またあした」の小母さんの名前になるんですが、浪花のアシは、伊勢のハマオギで、支那の花子は、とんだ汚いハナコです。

嘗て私は或る雜誌から頼まれて、「支那乞丐の研究」といふのを書いて、遺憾のない原稿料乞丐ぶりを發揮した……といふ前科さへ持つてゐるのですが、全く、一歩足を支那の土地に降した途端、その不潔、その惡臭に、てつきり乞丐の群だと早合點をしたのが、御承知の「苦力（クーリー）」です。

所が、支那生活に馴染んで來るに從つて、あの苦力よりも、もつと不潔で、もつ

と臭くつて、苦力よりも更に下の階級に屬するものに「兵隊」と「乞丐」とがあることを發見したんですから、後の「支那乞丐の研究」の權威の程を危ぶまれても仕方はありません。

兎に角、支那の何處へ行つても、旅行者についてまわる者は乞丐で、而もそれに普通の同情や憐憫の情から、一枚の銅貨でも投げ與へようものなら、今まで氣がつかなかつた彼方からも、此方からも、雲霞の如く駈け集まつて來て、旅行者の財布をはたかせるまで、喰ひついて離れぬダニのやうな執拗さは、全く支那の一人旅は、空おそろしいものだと、痛感させずにはおきません。

斯んな時、乞丐の方では貰ふのが當然の權利だといつた顏をします。甲が貰つた以上、同じ乞丐である乙や丙も亦、當然に貰ふべきだといふのです。そしてしまひには、物乞ひでなく、脅迫もしかねません。

三井洋行の支店の前に、毎日張り込んでゐて、こゝに出入りする日本の先生們の憐憫にすがつて喰つてゐる乞丐がありました。

何しろ乞丐の方は、これで結構な職場を確保してゐるのですが、困るのは三井洋行支店です。そこで考へた支店長の家人が、その乞丐にとつては、眼の玉のとび出るやうな大枚十錢の毛錢票を握らせて、職場を變へさせようといふので交渉させると、生れて始めて手にした、手の切れるやうな十錢札のためであつたか、其の日は素直に歸つて行つたのださうです。

ところが、あとがいけない。翌朝になると、またやつて來て、毎もの場所に坐り込んで、「可憐可憐我罷」(私をあわれと思召して)とやつてゐるのです。家人が啞然としたことは勿論ですが、仕方がない、汚い乞丐に門前で頑張られるよりも……といふので、また十錢札を一枚やつて、歸つて貰つたのださうです。

さあ、これからが大變です。毎朝〳〵、その乞丐は、三井洋行支店の門前まで出勤です。そして十錢札を貰つては歸る、いはゞ勤め人になつてしまひました。

所が或る朝のことです。毎ものやうに十錢札を差し出す家人に向つて、今日は三圓ばかり頂戴してゆきたいと言ふのです。吃驚した家人が、そのわけを聞くと、

「實は鄉里の山東まで歸つて來たいと思ふので、三十日ばかりの間はやつて來られません。就いては、其の間の分も、今日頂戴して行きたうございます」

と言つたんださうです。

これは乞食の一歩手前にあつた、長江沿岸の洪水と、滿洲事變の東北避難民との話ですから、昭和六年のこと、いさゝか事が舊聞になりますが。

楊子江沿岸からは、洪水の避難民が北京天津へと北上して來る。滿洲からは、日本軍よりも、日本軍に逐はれて逃げる自國の軍隊に追はれて、逃れて來た民衆が、これまた北京へ天津へと南下して來たのです。

それが乗物に乗るのではない、鍋釜もつて蒲團背負つて、野越え山越えての旅です。京津地方に到着するまでには一ヶ月以上もかゝつて、それが更に十一月頃になると、京津地方は、それらの避難民で「人山人海」になりました。

所がです。いくら溫い京津地方だつて、十月の末には、故宮のお濠にはスケートの出來る位の氷が張るのです。

避難民中には、折角京津地方に着いてをりながら、疲れと、寒さと、飢と、そして目的地に辿りついたといふ安心のために、バタバタ斃れるものが續出して行つたのです。

さうでない者でも、喰ふためには仕方がない、長い道中、その重さも厭はず持つて來た鍋釜を賣りました、蒲團を賣りました。そして其の擧句の果に、彼等の賣つたものは、何と其の子供であつたのです。

北京の王府井大街といへば、東京の銀座に當ります。そこの舗道をゆく男女は、老も若きも颯爽として通つてゐます。その人々がくるまるやうにして着てゐるのは、一着が千圓も五千圓もする溫かさうな毛皮の外套なのです。

しかも、葉の落ちつくした街路樹の下に、堵をなして並んでゐるのは、いま言つた子供を賣つてゐる避難民の憐れな姿なのです。通行人は、眼も呉れずに、昂然と通つてゆきます。

「五歳の男子は五圓に、七歳の女兒は八圓に……」

王府井の夕まぐれ、さうした子を賣る親の呼び聲が、呼んでも〳〵行人の足をとどめることが出來ず、空しく木枯に吹かれて消えていつたあの頃を思ふにつけても、國民政府の心なき政策のために、今度もまたさうした避難者が續出してゐるであらうと思ふと、國民政府は自業自得としても、返す返すも氣の毒なのは支那の民衆だといふ氣が、私にはするのです。（一二・一一・一五）

現代を超越した人達

嘗て人々――支那人は素より、日本人も――は言つた。

「日本人の多くが、辮髪を連想する程度にしか支那を了解してゐない間に、支那は變つたぞ。新興の意氣に燃えてるぞ。革命意識に火となつてゐるぞ。國民政府の支那は、起ち上つたんだぞ。眠れる獅子ぢやないんだぞ」と。

果してそうか。などと開き直ることをやめて、私は現在までの支那社會に、指導的な地位を占めて來た人々の中から、殆んど仙人かと思はれる二三の人の逸話を誌さうと思ふ。

張繼――と云へば、日本に留學したり、亡命したりしてゐるので、同胞の中に多くの知人を持つて居る、現代支那要人中でも屈指の人物であるが、彼は何しろ國民黨の長老で、大正九年に孫文が廣東に軍政府を再興した時の顧問であつた位で、格から言へば、蔣介石なんかは彼の前には「お控へなすつて」といつてしやがみ込まねばならないホンの三下奴に過ぎぬ位のものなのである。その張繼先生が、往年長江沿岸にコレラが猖獗を極めた時、政府代表として視察にいつて、其の足で北京へ來ると、そこに待ちうけてゐた記者團を引見して言つた。

「何しろ我輩が現地に赴いた時には、一日の死亡者が六百を超えるといふ猛烈な有様であつた。然し乍ら諸君、もう大丈夫だ。といふのは、我輩がこちらに來る日は、夜來の豪雨だつたからだ。思ふにあの雨では、流石のコレラ菌も死滅じてしまふことだらう」

翌日の朝刊は、わが横山大觀先生を髣髴させる風貌の張繼先生の寫眞と共に「豪雨沛然、虎疫屏息セン」の大見出しを掲げたものである。雨降つて地固まるで、痔が癒るといふのだと洒落にもならうが、大雨でコレラ菌が死滅する話など、支那で

なければ聞かれない朗らかな話ではないだらうか。

劉復――先年故人となつたが、このあいだまでは、學校都市北京の時髪女郎（モダンガール）から鬼神の如く、蛇蝎の如く、恐れられたり、憎まれたりした女子師範大學の校長である。元來、主義は國粋主義で、運動は劍術と拳術なんていふモダンボーイやモダンガールは、日本にだつて居ない様に、支那にだつて、苟くも時髪だと言はれる連中は、どれもこれも西洋かぶれの鼻もちならぬ連中が多く、さうした時髪女郎の弊風が、あゝ遂に最も良妻賢母の卵であるべき女子師範大學の學生までを風靡しつくしたといふ慨嘆すべき話がある。

話といふのは斯うだ。支那では李小姐だの王小姐だのといふ様に、娘を呼ぶ時の「小姐（シヤオチエ）」といふ言葉があるに拘らず、「密斯李」「密斯張」だのといはなければ、女學生つきあひが出來ない世の中になつてしまつたのである。「密斯」といふのは、言ふ迄もない英語のミスのことなのだが、これが教育部令といふ文部省令で嚴禁となつたのだから痛快である。而もこの密斯嚴禁の進言者が、劉復先生であつたと判つてからは、先生の憎まれること、ダンスホールを彈壓した警視總監の比ではなかつた。

兎に角、支那の國學者で、國粋主義者で、女子師範大學の校長で、謹嚴といふ字は此の人の爲にあるかと思はれる此の老先生――といつても今生きてゐたつて五十歳になつたばかり――の授業中に斯んな挿話がある。

女子學生の一人が、何かの折に、これも亦支那流行の「男女同權」といふ言葉を使つたら、先生は、世にも不思議なことを聞くものかなといつて莫名其妙（なんともいへない）顔をして、扨、おもむろに言つたことには、

「權といへばハカリのオモリの事ぢや。男子有權といふのは判るが、女子にも權が有るといふのが……どうも……」

と。そして深刻な顔をして、すつかり考へ込んでしまつたといふのである。この話など日本で男女同權を叫んでゐる老嬢（をばさん）達に知らせて上げたいものである。

まさか――といふ人の爲に極く最近、晨報の學藝欄で見たそんな要人達の國防意見の一つを御紹介する。

「近代戰に於いて最も吾人の恐るべきものは飛船であつて、又の名を飛機といふ(飛行船、又の名を飛行機といふ)。一たび我が頭上に爆彈を投下すれば人馬となく高樓大廈となく一瞬に飛んで消える。最も恐るべきものであるから世界各國之が、爲に防備專用の高射大砲を備へるに營々努力せざるはなく、爲に莫大なる軍費を費消しつゝあるは周知の所なるも、我國は外患交至の非常時なれば、斯かる設備の爲に巨額の軍費を計上せんよりは、我國固有の弩(いしゆみ)の矢に、石油をひたしたる布をつけ、之に火をつけて飛船を射ることとせば、製法と使用法の簡便と、經費の安價なることに於て、高射大砲にまさること萬萬なり。此の矢、一たび敵機に中らんか、矢につけたる火は忽ち敵機を燒き、飛行の自由を失はんこと必せり矣」

といふのである。

これについて思ひ出されるのは、彼の天津事變當時、塘沽駐屯のわが守備隊に智勇兼備を謳はれて居つた河崎政一隊長が、往訪の私に話してくれた話によると、

「當時日本の飛行機が何時とんで來て爆彈を落すか分らぬといふので、塘沽二萬の市民は生きた空はなかつた。すると何時の程にか、塘沽第一の大建築物たる製鹽會社に防空設備を施したから、日本の空襲に出會つた際には、製鹽會社に逃げこめば大丈夫だ、といふことになつた。そこで軍服の代りに支那服を着た河崎隊長、市民に化けて見にいつた。すると、支那式の土瓦で葺いた製鹽會社の屋根一面に、トタンが張つてあつた」

さうである。

房山旅行の挿話

昭和六年の秋。筆者は景教研究の世界的權威である明治大學の佐伯好郎先生のお伴をして、北京西郊一百里、房山の奥深く分け入つたことである。

行を共にする者、佐伯先生を隊長に、東方文化事業總委員會の杉村勇造氏、獨逸人ミュラー博士、それに筆者。從者を加へて二十二人の一行が、一方は峩々たる山、一方は淙々たる溪流の片岨道を轎と驢とによつて、鹽原や伊香保あたりの祖國日本の風光を懷ひながら越えたあの日の追憶は、いまもなほ筆者の眼前にある。

房山縣は、當時北支に於ける土匪猖獗の地。土匪襲來に慄えながら敢行した此の一行の房山旅行の目的は、文獻による研究の結果、佐伯先生が「景教東漸に關する鍵の所在地」と目せられた「十字寺跡」に、景教の遺物を探らうとするにあつた。

此の旅行は、筆者が擔當した寫眞撮影が、日沒と未明との光線の不足のために失敗に歸したことの外は、あらゆる點で大成功を收めたものであつた。

といふのは、房山縣城を去る十八里の深山を探査した私共は、遂に舊十字寺跡の大雄寶殿の庭前に於いて、大遼の應曆十年（西曆九六〇年）の建立にかゝる「三盆山崇聖院碑」と、大元の至正二十五年（西曆一三六五年）の「勅賜十字碑記」とを發見したるばかりか、景教東漸の鍵ともなるべき、約半米の十字架、而も其の四方にはエストランゴ式のシリヤ文字にて、詩篇第十四の「汝それを眺め、それを望めし」の句の彫刻された大理石の礎石を發見したからである。

斯くて、四百餘州を擧げて「萬寶山事件」「朝鮮事件」による排日の聲喧ましき九月十一日、「北京晨報」「世界日報」「益世報」「京報」「庸報」等々の北支の大新聞が、いづれも

「日人佐伯好郎氏一行、景教遺跡を發見す」

の大見出しの下に、私共一行の學界に對する貢献を報導し、

「日人、佐伯好郎教授は、一行の者と議し、此の史的遺物が斯の如き深山中に放置されてあることを惜しみ、費用一切を自辨しても、之を北京に運び來つて古物博物館に保存したいと語つてゐる」

旨を告げ、「庸報」の如きは、「古物保管機關まさに注意すべし」の大見出しまでつけて書き立てた。

更に翌十二日の「英文北京導報（ペキンリーダー）」には、ミュラー博士との連名になる佐伯先生の報告並に之が保存に對する希望が掲載せられて、一時、北京言論界の最大問題となつたかの觀を呈した。

筆者は、自分が扈從した此の房山旅行が、斯様に遽かに支那學界の大問題とならうとは、夢にも考へてゐなかつたといふ不明を、此の機會に告白せねばならない。

まことに、佐伯先生の此の發表は、ひとり支那學界のみならず、諸外國の學者間に於いても、問題となり、古物保存會も遂に活動を開始し、これが爲に再度調査員を房山に派遣した末、

「日人、佐伯教授の好意に甘ゆべからず」

との見地から、自から一切の費用を計上して、北京に運び來り、私共が拓つた「三盆山崇聖院碑」「勅賜十字碑記」の拓本と共に、之を午門樓上の歴史博物館に陳列し、當時は既に彼等にとつて「憎むべき仇」視しつゝあつた日本人の、學界に對する貢献を素直に承認したのであつた。

筆者は、佐伯好郎先生に從つてなした此の房山旅行の裡に、幾多の啓發を受けた。人間として、學究として、佐伯先生や、杉村氏の如何にすぐれた人々であるかに關して、私はこゝで書かうとは思はない。

唯一つ、同旅行中の挿話の一つを書くことによつて、筆者は自省の念を新しくし、希くは之を讀まれるうら若き學究諸君と共に、自戒の具としたいと思ふのである。

話といふのは斯うである。彼の「北京人」の骨の出たことでも有名な周口店で押車を降りると、老體であられる佐伯先生とミュラー博士は、四人の苦力の肩を借りる轎に乘られ、杉村氏と筆者とは驢馬に乘つて、屹崛たる山路を行つた。

一行が愈々險岨な山路に這入ると、ミュラー博士だけは轎を降りて歩行兒て行つた。其のために私共が目的の十字寺跡に至る一時間半も前に、ミュラー博士だけは其の門前に到着してゐた。

私共が、其の目的の地點に到つた時、私共は其の地點の外の崩れた土塀の前の石の上に腰を下して、私共の着くのを鶴首してゐるミュラー博士を發見した。そして私共が着くや、

「プロフェッサー佐伯。今日の旅行は、貴方の研究のために、あなたがせられた旅行です、私共は單なる從者に過ぎません。從つて、途中此處までは、誰が先頭に來ても差支へはないと思ひますが、これからはいけません。こゝから先は、當然あなたが先頭に這入られるべきです」

さういつたミュラー博士は、轎から降りられた佐伯先生を押して、十字寺跡の門内に入れたのである。

之を見た筆者は、慄然として暫し立ちすくんだ。時間にして二時間近く、先着のミュラー博士、既に目的地點の門前に來た以上、恐らく人情としては這入りたかつたであらう。それを、ぢつと門前の石に腰かけて、佐伯先生の到着を待つた所に、獨逸人學者としての、ミュラー博士の面目がある。學者の節義、學者の良心の發露がある。

「若し自分がミュラー博士であつたら……」

恐らくさうした思慮もなく、境内に侵入して行つたであらう。そして、日本の青

年學究として、獨逸の學者から輕蔑を買つたであらう――と考へると、彼の時彼の地點への先着者がミュラー博士であつて筆者でなかつたといふ一事だけでも、大きな天祐であり成功であつたやうな氣が、今も筆者にはしてならないのである。

遙かに北京村を想ふ

五年振りの北京であつた、青年の日の想ひ出多い北京の土地は、今以て追懷の種になりがちである。しかし、突如北京に現はれて見ると、青木翁だとか、布施さんだとか、言はゞ一種のクセを持つた人物は北京を去つて既に久しく、嘗ては王府井や單牌樓の行きづりにも、今のは何處の誰と見分けのついた北京村の人々がすつかり世代を異にした樣に、それが同胞と分つて居ても、全く何處の何兵衞さんやら何作どんやら、龍宮から戻つた浦島太郎みたいな、もどかしさと白々さを感ずる北京になつて居つた。

昔の北京村の人々は、官に居ると野に在るとの區別なく、富めると貧しきとの差別なく、悉くの人が日本人である誇りと自覺とを持つて居つた上に、心ない青年の

私達が見聞してさへ、泣けて來る樣な人情美談が、其處彼處にゴロ〳〵して居つた樣に覺へる。街頭に見る同胞婦人連の風俗にしたつて、支那人の物嗤ひの種になる樣な風俗はなかつたし、潔癖だつた當時の私達が、たとへば歩兵隊の記念日等に、職業婦人と並んで坐つても、決して職業婦人を意識したりなどはしなかつた。それよりも寧ろ私達は、貴婦人と共にあるを意識させられたことである。それが普通の家庭婦人の場合なら尙更のことである。

五年振りに北京に入り、北京に住んで見て、一番最初に私の胸をついたものは、そこに住む同胞の中に、日本人である誇りは持つてゐても日本人としての自覺を持たぬ人の案外に多いことであつた。何分にも瞥見によるのだから、間違つてゐたら謹しんでお詫びする、そして私は私の瞥見が間違つてゐて呉れる樣にと今も尙祈つてさへ居ることである。苟くも今次事變後の支那で生活するお互ひは、日本人である誇りだけで生活しようと考へてはならぬ。誇りは兎もすれば支那に住む支那人への蔑視となり、横暴となり易い。若しそんなことにでもなつては、折角の今次皇軍出師の神聖さを、幾分でも冒瀆するの結果となるは勿論、支那人を傷つけ、自からをも傷つけるの結果になると、私は思ふ。

日本人としての誇りだけで支那に生活するのは、たとへて言はうなら白刃をひけらかして人込みの中を行く樣なものである。相手が傷くだけに止まらぬ、勢の赴くところ、自らも傷つかねばならぬ秋がある。

それにはどうしても、その白刃を包むに、日本人たるの自覺を以てせねばなるまい。大國民たるの尊嚴、大國民たるの雅懷、そして稔る程に頭をたれる稻穗の姿が、必要にならうと私は思ふ。

既に前述の如く、北京村には私の知己故舊、去つて久しくなつた。當時の軍關係でも粟飯原隊長は先日、新宿からの省線電車の中で一緒になり、近日中に訪門の約束をして置いたらもう臺灣の要塞司令官になつて行つてしまはれたし、公使館付武

官だつた永津中佐が今は少將になつて、三度目かの北京つとめは、御世話になつた方だけに、是非共お目にかかつて置きたかつたと、東京に戻つて二ヶ月今以て悔んでゐる始末。大使館も、矢野、中山、林の諸氏去つて僅かに原田龍一氏が童顔益々輝かしく。長城吟社や雜草句會で鳴らした河村政次氏。原田氏には持つて生れた狷介から隨分手を燒かせたことであつたが、手を燒かせなかつた者よりは、少しはお國の、乃至は外務省文化事業部のお爲になつてゐるといふ自惚から、私は臆面もなく、謁安（チンアン）に罷り出たことである。河村氏には電話だけで別れてしまつた。會へば恐らく、昔とちがつて現實的な世相、北京村の傾向を慨嘆されたであらう。きつと。

記者團の人々では全然一新して久しい。横田、松本、風間、長谷川、布施老先輩から佐々木、福代の諸君等、記者團の諸公、飲むに可し、憂ふるに可し、慨るに可きことは、今日も尙昨の如しとは信ずるものの、知つた人のなくなつた北京記者團は既に私にとつては他人の家に等しかつた。唯、僅かにテニスをやつたり、酒をのんだりするあらゆる機會を通じて、其の蘊蓄と其の國士的風格とを以て、導いて吳れた風間古城氏が依然健在で、特に歴史のある北京新聞を既倒に回しての奮闘ぶりは、私をうれしくさせた。但し、往年萬壽山麓に住んで「青大人」の敬稱で支那人から崇拜せられた青木翁――今は東京で國士館大學に教鞭をとり乍ら依然酒杯に生きて居る――と共に酒仙に近かりし風間老が、其の健康の爲に杯に遠ざかつて居られることだけが、何といつても心殘りがせられた。

民團の長老、辻野虛人翁御夫妻は、恫縣の先輩で、昔は殆んど我が家の樣な我儘をさせて貰つた方だつた。今度も二度三度たづねて行つたことである。翁も老い、夫人も老い、今更に私自からの年丈けたのを痛感させられたことである。私も其處を出たのだが、同學會語學校の飛躍其の他に關し、北京村がこの翁の敎示に俟つ所尙多かるべきを信ずるのは、獨り一人の私のみではなからう。然るに此の翁の悠々として世塵を外の廠甸（チヤンデン）住ゐは、心憎くもあり口惜しくもあつた。

我儘を許して呉れた恩人といへば石橋思京先生である。北京の學者といへば、日本人も毛唐人も、先づ第一に石橋先生を推す。世界的支那學者として有名な佐伯好郎先生が當時公使館の御大だつた矢野參事官から、考古學では何いとつても〇〇博士が日本一でせうと聞かれて、〇〇博士が十人寄つても石橋さんには叶ひますまいと激賞され、矢野氏が吃驚したといふ話題は既に古くなつて久しい。あの溫厚玉成の石橋先生が、今は市公署に入つて、好きな舊蹟の調査に日を送り、支那人吏員から尊敬されてゐるのを見て來たことは、私にとつての大きな土產であつた。

同鄕といへば、辻野翁の外に、橋川醉軒氏、加藤勇氏がある。一方は老北京で東方文化事業總委員會の元締め、一方は事變後に設けられた帝國地方行政學會北支事務局の初代局長である。橋川さんは事變後活潑になつた文化事業の首惱として多忙を極めて居られた。私は斯の人の今迄の學業の完成を見るまでは、その政治的進出に贊成しない方の後輩であるが、自分が持つた一切の技能をあげて戰爭目的貫徹にすゝまねばならぬ斯の秋、氏の行き方を一應も二應も是認したことであつた。加藤氏は、故舊といふのでなく今度の北京滯在中に初めて會つた人であつたが、內に烈烈の熱血を藏しながら、外面は飽くまで謙虛な紳士、而も此處には蜂集、中村、大內、橫山等々、一騎當千のエキスパートが揃つて居て、打てば響く、笛吹かずとも躍るのピチ〳〵した仕事ぶりで、政府の企劃を助けて居られるさまは、事變後の支那に多くなつたあの誇大妄想的自己宣傳にうき身をやつす世の事業家連と、質を異にして居るもの、斯の種の事業家連こそ、ひとり北支に限らず、全支に亘つて今後益々助長、飛躍させてやつて欲しいものと痛感したことである。

最後に書いて置きたいことは、往年北京在住中の私を中心に集つた北京生れの同胞靑年達のことである。當時私自身は猶狂不羈、公使館にとつても、公使館警察にとつても、乃至は留學生仲間にとつても、最も面憎い邦人の一人であつた。このことは今日迄の五年間を通じて、最も自省、深く慚づる所であるが、しかし、其の私

にして尙且つ他のどの邦人よりも尊いことを成就したものがありとすれば、それは北京生れの第二世並に北京村青年諸君との友情の一點であると信ずる。今でも私は、徒らに高踏を誇る大學教授たらんよりは、寧ろ市井のボスでありたいと念じて居るが、當時北京にあつた同胞青年諸君、特に支那語に巧みな、而して土地や周圍から受ける素直さを持ち、且つ土地柄だけに充分の暇を持つた純情の青年諸君の團結を計り、且つこれ等の人々に、日本人としての最も崇高なる生き方を吹き込むことに努めた一事に就ては、そして當時の諸君が、滿洲事變、支那事變に際して粉骨の至誠を盡したことを報じ、且つそれと同時に皆が皆、

「嘗て貴下が言はれた君國の爲に一命を捧げる秋が今だ、此の時だと思ひました」と告げて來たことに就て、私は限りない誇りを持つて書き留めて置きたい。

今度北京に入るに先だち、約一ヶ月滿洲を巡り、滿洲各地に活躍してゐるそれらの諸君から、乃至は北京に殘つて今は夫となり父となつた諸君から、

「當時貴下から愛國の熱情に燃へさせられなかつたら、私共は恐らく日本人としての自覺など持ち得る筈がなく、從つて君國の大事に際して挺身御奉公する樣な氣も起さず、碌々として老い朽ちたことでせう」

と言はれ、中には感憤激悲、繼ぐに流涕を以てする人さへあつた。此の一事、筆禍につぐに舌禍、北京村のホコリならぬゴミにも價せざりし、往年の私の、萬罪をつぐなつて剩りあり――とは言へないだらうか。

河北誰か義人なからんやである。我等の父祖先輩が尊い血を流した北淸事變の昔をいふ迄もなく、天津事變や今次事變を通じ、忠君愛國の碧血、凝りて草を染め土を染めた北京の地である。其處に生れ、其處に住む青年に、一人として忠君愛國の至誠に火と化らぬ若者があらうか。

要は唯、これに點火するの勞あるのみだと私は信ずる。前述の諸君は、此の微々たる私によつてさへ燃えたのである。今日の北京には、青少年の指導者たるべきす

ぐれた先達が雲の如く集まつて居られるのである。何卒、この青年を尊び、此の青年に望み、此の青年を導いてやつて頂きたいと念じてやまぬ。

東京で、アメリカ第二世の教育に當つてゐる私の友人は、今や彼等に祖國精神を扶植することに苦しみ瘠せてゐる。滿洲や支那に於ける第二世の精神教育も、今日に於て之を等閑に附するならば、恐らくアメリカ第二世とまでは墮ちずとも、殆んどそれに近きまでに之が再教育が至難となるであらう。滿洲や支那の同胞青少年に、祖國教育をするのは實に今、斯の機であると思ふ。

鐵は何時だつて赤い中に之を打たねばならぬからである。

支那覺え書

日本通と支那通

古來我國に在住した外人宣教師の數は夥しいが、それ等の宣教師群を通じて言ひ得る最も興味あることは、彼等の中で日本語の巧みな日本通程日本人に嫌はれ、日本語は拙くとも日本人の性質を理解する爲に、不斷に努めて居つた者ほど日本人の間に好評を博してゐる一事である。

○

嘗て牛込に住んで居た英人宣教師チャモレーの如きは全く後者の適例とも言ふべく、日本語の拙いことに於いては在留外人中の尤なる者であつたが、其の日本人間に好評の嘖々たる點に至つては一切の在留外人に擢んでて居つた。

而も其の好評の因由は、公爵の分れであるといふ彼の高貴な人品や、オクスフオ

ード出といふ彼の深遠な學識や、或は獨力を以て小笠原島に建立して寄附して行つた聖・ジョージ會堂やに發するのではなくして、一に我々日本人の性質なり生活なりを眞に理解せんとして拂つた彼の不斷の努力に發することは、特に注目すべき點であらう。

彼が其の雇傭の日本人召使に向つて、毎日（靴を磨いてあるか）と念を押すの煩を避けんとして、十三足の平常靴を常備して居つた心掛けこそ、他の在留外人の誰にもまして彼が日本人間に人氣を博した所以なのである。

之に反し、日本語に巧みな多くの日本通宣教師は、自分が知れる範圍の乏しい日本理解の知識を信頼して、それによつて日本の一切を律して行かうと欲したのであるから、日本人の反感をかつたのも亦故なしとせぬ。要之、彼等は、自分が日本語を解することから、延いて日本をも解し得たと誤信した爲に、思はざる失敗をして居つた譯である。

○

所でこれは、支那に於ける我國人の場合にも考へられる事である。從來は素より、最近頓に目立つて來た所謂支那通なる者が、知らず識らずの間に斯かる「己を以て他を推す」の愚を演じ、それが更に支那人の反日感情を培ふことにのみ役立つてゐることは見逃し難い事實である。

曠古の大事變を契機として日支關係の一切が再出發せんとする時、世の所謂支那通は十分此の點を自省すべく、一般人士も亦前述チャモレーの心事に倣ふならば直ちに日支國民の眞の提携に參與し得ることを思ひ、從來の「支那は支那通に」の態度を一變すべきであらう。

支那は戰場である

言ふまでもなく支那大陸では、我が忠勇なる將兵諸君が屍山血河の中に、勇猛果敢な戰鬪を續けて居る。其の支那大陸へ、今や內地から玉石雜多の有象無象がわんさとばかりに殺到して行つてゐる。そして出先當局の足手まとひは愚か、手を燒かせてさへ居るのである。尤も彼等の渡支の名目は、皇軍慰問、日支提携、實業視察、販路擴張、敎育視察等々何れも立派なもので、誰も反對のしようの無い位であるから、素より結構な企圖として當局が證明書を下附したり渡支を支援したりするのは、これ亦尤も至極と謂つてよい。

所が其の連中の殆んど全部が此のドサクサ紛れに一仕事しようとする徒や、名を戰線慰問に藉りての物見遊山客を以て占められて居ることは、官民ともに寒心すべく警戒すべきであらう。

○

曾て滿洲事變當時、皇軍慰問に名を藉りた團體や個人が、如何にその事を宣傳や賣名の具に供して居つたか、乃至は彼等が如何に滿洲土著民の心證を害して廻つたか——に關しては、我が出先當局が最もよく知つてゐる筈である。それだからこそ、あの當時の渡滿の容易だつたのに比べて、今次事變以後の渡支には一定の手續きが必要となり當局の許可を必要とするに至つたのである。

それ故當局としては今少しく嚴重に渡支希望者に臨み、その許否に就いては更に愼重なる態度を必要とするであらう。出願さへすれば猫にも杓子にも許可を與へること昨今の如くんば、折角の企圖が水泡に歸するは勿論、我が對支國策の妨害となるであらう。

○

個人は個人で、團體は團體で、それ〴〵支那に使節を派遣しようとし、學校關係も亦來る暑中休暇を利用して、多數學生を支那に派遣しようとしてゐる。顧みて內を見れば、國民上下を擧つて戰爭目的達成の爲に孜々として努めてゐるし、外を見れば更に重大なる難局の豫想されつゝある秋、筆者は個人並びに學校團體等の代表派遣の時に非ざるを主張したい。況や物見遊山乃至は修學旅行の對象とすべく、支那大陸は南も北も、餘りに聖なる戰場であり、皇軍將士の現に苦鬪しつゝある土地なるに於てをや——である。

對支文化工作尙早論

過日、鄕誠之助男と會見した王克敏氏が、「現在の支那と日本との結合には理論や理想は必要でない、如何にして現實に支那人をして職にありつかせるか、これが現實の問題である」と述べ、日支提携は經濟からといふ眞意を吐露したといふ。

これが王氏によつて代表されたる親日要人の眞意である限り、我々は我が對支工作の全般的なるものは寧ろ後廻しとして、この方面に主力を注ぎ、急速なる實踐を以て臨むことを必要とする。

○

然るに、斯かる緊急を要する問題をおいて、逆に精神的結合だの、イデオロギーの一致だのを唱へて廻る徒が多すぎるのである。

尤も日本の傳統は精神を主に置いて來た。我々も亦日本に於ては物質よりも精神を主に置いてゐる。しかし、遺憾乍ら相手が惡いのである。それにも拘らず事變當時までは頻りに支那人の現實主義物質主義を攻擊してゐた人達までが、今ではすつかり支那人を日本人と見誤つてゐる憾みがあるのである。

○

我が國が支那の占領區域で行ふべきことは、多きを必要としないのである、唯一つ「皇軍の威武により支那民衆の生活が國府當時に比べて五厘でも一錢でも樂になつたことを、彼等に知らしめれば足りる」のである。

建國以來今日まで封建領主か貪官汚吏か乃至は地方軍閥、土豪劣紳か――斯う數へて來ると何と良民の生活を脅かす者が支那には多かつたことか――に傷めつけられて來つた支那民衆にとつて最も必要なのは王氏のいふ職といふよりも寧ろ食の保證であつた。決して精神や主義や思想ではないである。

○

筆者が嘗て北支教育機關の復活に際しては、法文科系の一切は百害あつて一利なき旨を說いたのも、起因はそこにある。而して最近北京大學の開放に際して農科醫科のみを開いた由をきいて喜んでゐるのである。

何故ならばあと技藝、理、工の三科を復活すれば、それで北京大學は復活したといへるからである。嗚呼、それなのに、ソレナノニ、又復我國の識者と言はれる文化人が大擧支那へ押し渡り、文化提携をやらうといふのである。

日支文化提携の尙早は玆では論じまいが、映畫による文化提携の掛聲勇ましく出來上つた「東洋平和の道」について言つても、あれに要した一切の費用を銃後施設に、乃至は傷病兵諸君慰安の爲に使つた方が、餘程東洋平和の爲になつたらうと思ふのは、啻に筆者一人の偏見であらうか。

○

王克敏氏の言に徵する迄もなく、今の日支間に緊要なるものは經濟工作であつて、文化工作は未だ不急の工作と謂はざるを得ない。

切に言を當局に寄せる、不急の工作に費消する巨額の資金が――當局のものたると民間のものたるとを問はず――有るならば、軍事資なり國防費なり、乃至は傷病勇士諸君慰安等の、緊急不可缺の問題の爲に使はしめ給へと。

支那へ醫療班を送れ

戰爭と流行病とが切つても切れぬ關係のあることは周知の事實である。更に又、洪水の後に各種流行病が猖獗を極めることも亦人の知る所である。

所で支那は、一年に垂んとする戰場である上に、蔣介石の軍隊の手によつて黃河の堤防を潰され、中支に大洪水の現出を見、更にまた暴虐なる彼等の魔手が、揚子江堤防にまで及ばんの勢ひにあつて、さなきだに各種流行病の本場である支那が、「戰爭と洪水」とを加へて、大陸を風靡するもの、赤露の赤い風よりも、先づ流行病なりと斷じて不可はないらしいのである。

○

此の時に當つて、我々はさうした中で戰鬪する我が將兵諸君の辛勞の倍加するを

思ひ、愈々感謝の念を新にすべきは勿論であるが、戰鬪行爲以外の對支諸工作に關して、愈々至急を要するものと、然らざるものとの區別が判然したことを痛感するのである。

卽ち最も焦眉の急なりとする工作は、兵火水災の避難民の救濟と、流行病の防止であらう。特に後者の工作の恩澤は、ひとり支那民衆のみならず、我が在支同胞にも及び、斯くして多數の日支人を流行病の被害から同時に免れしめ得るのである。我を助け彼を救ふ、一石二鳥、これ程効果的な對支工作が外にあらうか。

○

從來と雖も、支那民衆の保健衞生の爲に、同仁會を主とする優秀な我が醫術の大陸進出はあり、且つその活動は事變以來益々活潑になつてはゐる。しかし我々はそれだけで以て足れりとしてはならぬ。今こそ百尺竿頭十歩も百歩も進めるべきである。同仁會等も其の本來の使命に鑑みて、東京醫院の如きは一時閉鎖して、その機能の一切をあげて大陸の防疫の爲に進出せしむべきであると思ふ。

○

前に不急の對支工作たる文敎使節出發に横槍を入れた外務省文化事業部は、久し振りで其の存在を現し、健在を示したついでに、今一歩進んで、下らぬ觀念論者や神がゝり連の代りに、多數の醫療班を現地に送つて、緊急必須の對支工作擔當者となるべきであらう。それには、同部が多年手にかけ庇護して來た同仁會の機能を擴大强化するのも一手、全國の醫師會其の他を動員するのも一法、切に臨機の處置の講ぜられんことを望む。

文化事業部への非難

滿洲事變以來、外務省を非難し、外務省を無能呼はりすることが、一つの習慣となつて今日に及んでゐる。さうした傾向の當否はさて置き、斯かる非難の原因が、外務省側にあつたことは事實で、歴代外務大臣といふも常に外交事務家であり、眞の外交家と稱するに足る人物でなかつたことも、大きな原因として外務省が世の非難を甘受すべき弱味となつて居つたことである。

坊主が憎けりや袈裟まで――式に、世の非難攻撃にさらされ、無爲無能と呼ばれて來たものに、外務省文化事業部がある。特に、支那事變以後の對支文化工作に關聯して、その無能を指摘し、從來の無爲を攻撃することが、一部の社會では一つの流行とさへなつてゐる感がある。我等は北支に於て、甚だしきは帝都の眞中に於て、堂々たる公開の席上でこれが論ぜられてゐるのを見る。そして何も知らぬ聽衆が附和雷同してゐる姿を見る。左樣に、外務省文化事業部が、過去から現在へかけて、無能無爲であつたのかどうかと言へば、しかく我等は早計に斷定し去ることの出來ない多くの事實を知つてゐる。

支那留學生の指導、研究員留學生の派遣、乃至は北京上海の研究所、東京京都の研究所の設置、更に又彼我碩學の交換、圖書の出版等、地味ではあつたが、兎に角孜々として努めて來た努力と其の日支文化への貢献とは十分に買ふべきである。

○

然るに、何故其の努力と貢献とが買はれないで、其の反對の方面のみが針小棒大に放送せられるのであらうか。そこに我等は、對支工作の中心勢力と外務省とが現地に於ても對立して居つた――といふ從來の風評妄語が原動力をなしてゐることを見逃すことが出來ぬ。それだからこそ、對支文化工作のヘゲモニーを、外務省文化、

事業部から奪ひ取らとする一部野心家が、中心勢力への迎合乃至は自己の存在を強調する爲に、專ら其の主力を文化事業部攻擊に集中してゐるのだといへる。諸般の對支工作を統轄する地位にある人々にとつての危險はこゝにある。

現に過日も軍人會館に於ける講演會に於て、文化事業部の無爲無能をならした東洋思想家と稱する人物が、多年文化事業部を利用して衣食し、遂に迷惑だけをかけ放した人物であつた。

此の徒の口から文化事業部の惡聲が放たれるべき筈が無いにも不拘、それが敢て吐かれる所以こそ、當局者も國民も十分に戒心すべき點であらう。

直言すれば、當局者は○○と××との對立といふが如き、流言の種を提供せぬことである。そして事變のドサクサに一仕事せんとする者の、策動の根源を絶つことである。國民亦斯かる徒の悲憤口調に附和雷同せぬことである。

苟くも對外機關である限り、之を支持し後援して、其の本然の使命を遂行させるのが、最も賢明なる方法なのである。

其の之を讒謗し、之を攻擊すること昨今の如くんば、遂に、我が對支文化工作は一歩の漸進すらも期待し得ないであらう。先哲も言つた如く——自から侮かしめて、而る後人之を侮かしめるが爲である。

○

先日の各紙が報道した。五十名近い中支防疫班を派遣し、上海南京に防疫病院を設置するのは、寔に外務省文化事業部のヒットである。我等は同部が今後と雖も、事の日支の爲になる事なら、善にもあれ惡にもあれ逞ましく猪突すべきことを希望する。從來の同部には、其の逞ましさが乏しかつたのである。

文化協議會と文部省

去月二十九日、北京の有名な懐仁堂において、日支兩國の文化人の第一線の者宿を網羅して、東亞文化協議會がその成立大會を擧げた。これによつて、事變以來、あらゆる個人並に團體がその指導權獲得の爲めに猛烈な暗躍をつゞけてゐた對支文化工作の擔當者も、落着くべき所に落着き、その將來の見透しも安定性も一應つけられる樣になつたのは、國家の爲めに慶祝せざるを得ない。

それにつけても、從來各種の策動をつゞけ、現地各機關から文化ブローカーのニックネームをつけられてゐるのも知らず、對支文化工作の指導者を以て任じてゐた失職教授や學校企業屋連中が、この文化協議會の成立によつて、鳶に油揚げをさらはれた形で呆然自失してゐるのは、近來の大醜態と嗤ふべきである。

苟くも國家の大策たる對支文化工作である。それを一二の團體や個人が、而も私利私慾を挾んで拔け駈け式に擔當者にならうとしたのだから、抑もその出發點から して間違つてゐたのである。その外務、文部、軍部の協力によつて日本第一流文化人を網羅し、在北支の文化人を擧げて結成された東亞文化協議會の前に、さうした團體並に個人の策動が、雲消霧散したのは、固より當然の結果と謂つてよい。

○

寔に我が對支文化工作は、今次文化協議會の成立によつて本然の軌道に乘つたものと斷じて不可なく、今後は此の審議機關を母胎として實踐機關が生れゝば足りるの段取りとなつた。

所で北京に於ける文化協議會の成立大會に出席し、筆者の最も不可解とした所のものは、外務や軍部と協力して東亞文教百年の礎石を築くべかりし我が文部省の態度であつた。當日臨時政府よりは王克敏委員長の祝辭があり、我が大使館參事官、

軍司令官、特務部長等の祝辭あり、外務大臣、陸軍大臣、參謀次長、關東軍、朝鮮軍司令官よりの祝電が披露せられたに拘らず、我が總理大臣は愚か文部大臣の祝辭祝電すらも缺いて居つたことは、折角の歴史的大會の光輝を幾分でも損したものであると同時に、文部省當局の國策に對する協力の誠意を疑はしめるものであつた。

文化協議會と銘打ち乍ら、恰も外務と軍務のみの大會なるかの如き印象を日支兩國人に與へた責は、一に荒木文相と文部省の役人諸君によつて分擔されるべきものである。斯くの如くにして文部當局は、爾後教育問題に關する一切の權威を外務と軍部とに委讓じて文句なしとするなら論外であるが、さもなくんば今少し積極的に此の問題に協力すべきであらう。戰鬪と治安維持と、殆ど寧日なき將兵諸君に、文化問題にまで累を及ぼしつゝあることに就いては、此際特に三省すべきであらう。

文化協議會と第二次大會

今夏北京に於て盛大な成立大會を擧げた東亞文化協議會は、十一月には支那から湯爾和會長以下の文化人を東京に迎へて、第二次大會を開くことになつた。北京に於ける第一次大會は、我が對支文化工作の據當者を中外に宣明したことと、日支文化提携の最高審議機關、乃至は建議機關を確立したと言ふだけで、十分の成功であり、意義があつた。從つて成立式後、分科委員會の人文科學側の委員が、北京に文科大學を作れ——などといふ勝手な熱をあげたこと等、ほんの座興として笑殺して差支へないと思ふ。

然し乍ら、今度東京で行はれる第二次大會は、愈々同會が本腰になつて、何らかの形で存在の意義を發揮しない限り、今迄にもあつた紙上の計畫、乃至は交驩に終

つてしまひ、我が對支文化工作を永遠に軌道から外してしまふことになるのであるから、其の一切の云爲が、座興としては許されなくなるのである。

既に對支文化工作に多年の經驗を有する外務省文化事業部を始め關係當局は、假令それが興亞院に包含されようとも、當初の使命を放擲することは出來ぬかぎり、對内的な摩擦に過敏になる神經を、斯の問題に集中して、能く東亞文化百年の礎石を此の機會に樹立すべく、萬全の努力を拂ふべきであることは言を俟たぬ。

と同時に、第一次大會の跡を省みて、月餘に迫つた第二次大會を、より有意義ならしめるべく備へねばならぬ。

○

第一に省みるべきは、協議員の人選である。卽ち支那側委員が何れも現代支那を代表する青壯年であつたに反し、日本側委員が何れも彼等に倍する老耄者であつたことである。

斯くゼネレーションを異にした兩國委員の間に、眞の隔意なき融合親善の實が遂げられたと信ずるなら、其の人は蓋し神に近い。一方は新鋭一方は老朽。

尤もそれなればこそ、古來壽を尙ぶ支那人から、我が委員一行が尊敬されたのだと樂觀するならそれ迄であるが、然し見逃してならぬことに、之が爲に日本側委員の多くが、意識せるとせざるとに拘らず、支那側委員を指導してやるといふ傲慢な態度を示した一事がある。

これが自尊心の强い支那側委員に、文化提携への協力を快しとせぬ一種の風潮を生ぜしめ、熱意を失はしめたことを忘れてはならぬ。

○

如何にも學問的には日本側委員の一人一人は、支那側委員が束になつても敵はぬ權威者揃ひではあつた。しかし政治的な經綸や手腕に至つては、遙かに彼等の足許にも及ばぬことを省みるべきである。

支那では學者卽ち政治家、政治家卽學者なのである。新時代の呼吸と、斯の點を無視してかゝれば、文化協議會の第二次大會の成功は毫も期待出來まい。

その之を成功に導く方法は、日本側委員の年齡を若くすることである。支那側委員と同じ世代の學究を加へて、共に謀り與に憂へしめることである。

苟くも支那を導くとか、敎へるとかいふ云爲は、之を戒める位の、政治的手腕を持つた學者を加へてかゝることである。

支那學者を呵る

支那學者とは何か——。などゝいふ議論はするまい。たゞこゝに世にも不思議な存在に、支那學者といふ一群の學者のあることを指摘し、此の人々が、何等、君國の大事に當つても貢獻することのない一事を喝破しておきたい。

一般に確信されてゐる所に從ふと、支那の古典、支那文化の研究に從事する者のみが支那學者——の名稱を獨占して居り、平常も人に臨むに、支那の事は己に任せろ——とばかりに、專門家面をしてゐるのである。

筆者はそれを僭稱であるとは謂はぬ、傲岸であるとも謂はぬ。唯、滿洲事變、支那事變といふ君國の大事が、他ならぬ滿洲支那の大陸に於いて次々と展開されてゐる最近の數年間を顧み、此の人達が拱手傍觀、殆んど君國のために何の貢獻をもな

すなき醜態には、已めんとして已める能はざる憎惡輕蔑の情を感ずる者である。

○

彼等は常にいふ、「溫古知新」であると。併し乍ら、此の言葉は、「溫古」且つ「知新」にして、初めて意義あるものと謂ふべきで、「溫古」にこれ足らず、溫古に終始して居る彼等に反省を要求する言葉でこそあれ、斷じて彼等今日の態度を正當化する言葉ではあるまい。

まして今日の日本が直面してゐる時局は、嘗て日露戰爭を知らなかつたといふ非國民を目して、却つて學者らしき風懷なるかの如くに傳へられた、悠長な時局ではない。力のある者は力の全てを、金のある者は金の全てを。日本の持つ一切の力を傾けつくしても、事變の完遂を成就せねばならぬ時である。此の時に於いて、支那研究に從事しつゝある者の全ての力は、この目的のために動員されねばならぬことは、今更言を俟つまい。

名を學問研究に藉りて、書物の蟲化しつゝあつても、支那に關する君國の大事に何の貢獻の實なき所謂「支那學者」の存在こそ、全く昭和日本、非常時日本の不思議でなくて何であらうか。

○

筆者は、過般の北支出張の際、同地にある軍官民各界の同胞から、生々しい北京籠城の追憶談をきいた。その一つに、

「事變勃發と同時に、言語や土地に不馴れな到着部隊のために、在北京留學生の協力を乞ふたが、若い留學生達はいづれも欣然身を挺して此の事に膺つて呉れた。然るにさうした留學生中、支那學の研究に來て居つた某教授だけは、――自分は學問の研究に來て居るので、戰爭の手傳ひに來て居るのではない――と放言し並居る邦人をして呆然たらしめた」

といふことがあつた。而も、先日の事變記念日の某雜誌の「北京籠城を語る座談會」

に出て、得々辯じてゐる大學教授が、何と其の時の某教授ではなかつたか。

筆者は、此の機會に於いてはつきりと主張したい。それは君國のために貢獻する所なきものは、たとひ其の學が如何に深遠であらうと、其の說が如何に卓論であらうと、それは學問でも、學者でもない——といふことである。

まして、君國の大事よりもその所謂學問研究を上位に置かんとするが如き徒は、外に如何なる美點長所を持つ者と雖も、之を敎壇に立たしめるべきではあるまい。

○

今次事變は愈〻擴大する。それはたとひ百の聲明、千の聲明を以てしようとも、避け難き必然性を以てわれ等の前にある。

此の時に當つて、平生無事の際には、支那に關する專門家面を以て任じ、而も一旦緩急の際には呆然自失、甚しきは某教授の如き、日本人ならぬ腐儒の現はれるのをさへ見る。其の平常に養ふ所、說く所を疑はれても、何の遁辭があらうぞ。

經濟開發の先決要件

北支が從來經濟的には未發達のまゝに放置せられ、甚しきは中南支那の植民地と化しつゝあつたことは、既に周く人の知る所である。

然らば、其の根本原因は何か——と言ふに、畢竟するところ北支が其の全地域に亘つて運輸資源に惠まれず、必要な運輸施設を缺如してゐることに因るのである。

從つて、最近頓に喧ましくなつた北支の經濟開發に、先決要件をなすものは、交通機關の施設完備を措いて他にはないであらう。交通機關さへ完備すれば、爾餘の經濟開發の如きは自然に緒に就くものと斷言して不可はないからである。

北支の交通機關として、先づ考へられるべきものに、河川、鐵道、並に港灣の三がある。

北支の河川その他の內水路は、南船北馬の諺が示す如く、根本的に惠まれたものとは謂へない。黃河其の他の河流が東に流れて勃海に注ぐものが有つても、水源に深林を持たないが爲に、徒らに延長のみ大にして、水運の便が殆んどなく、將來と雖も交通路としての價値は絕無であらう。

唯、北支全域に存する大運河のみは、多少とも之に期待することが出來るが、此の水路も亦、嘗て日米資本によつて改修して以來十數年、其の後の維持が不完全であつたが爲に、再び破壞せられ、其の或る部分の如きは水田化されつゝあるものさへ寡くはないのである。

併しながら、日本によつて之が整備に要する資本をさへ投じるならば、山東河北兩省に於ける農村の棉花其の他の物產輸送には、最も有効なものとなるであらう。

從つて、之が整備の方法も、單なる改修に終らずして、ドイツ、アメリカ等の運河に見る如く、舟舸牽引には運河の兩側の何れか一方に、機關車利用の設備をなし、充分に近代化することが必要である。

○

北支に於ける內水路の情態が、右の如き悲觀すべきものである限り、北支の交通は專ら鐵道の完成完備に俟たざるを得まい。而も既設の鐵道は滿洲とは異り、山西省の省營鐵道以外は、今なほ日本以外の外國資本によつて運營されつゝある現狀である。從つて之を日本側に接收することが先決要件となるであらう。

現在、京漢・津浦・京綏・隴海等の主要鐵道は、關稅其の他の確實な擔保を有するもの以外は、大部分之に投下された外國資本の、債務の元利支拂にすら困難を感じてゐる情態にあるけれども、適當な改善さへ加へれば、必ず相當の收益をあげることが出來るものと考へられるのである。

從つて、之が接收の技術的困難さへ克服すれば、頗る樂觀して差支へないばかりか、場合によつては、別に日本側によつて、競爭線を敷設し、既設鐵道の收益價値

を低減せしめ、究極に於いては日本側に手放さゞるを得ない樣に、仕向けることも一策である。

尤も斯うした場合の競爭線とは、南北を貫くものではなくして東西を貫くもの、例へば滄石線の如く、勃海灣沿岸と、山西、察哈爾、河南、陝西等の奥地諸省とを連絡するものであることを必要とする。

此の競爭線は、右の目的以外にも北支交通上不可缺の路線であつて、早晩之が敷設を必要とするものである點よりしても、言はゞ一石二鳥の効果をあげることが出來ると信ずるのである。

○

これまた周知の如く、北支は遺憾にして良港を持つてゐない。現に太沽、塘沽、天津なる一連の碼頭によつて知られてゐる白河々口は、築港の効果が極めて少く、結局はそれ以外の地に新に築造するか、さもなければ既設の海港を利用するか、何れかの一つ、若くは双方を考慮しなければなるまい。

既設の海港といへば、青島、連雲港以外には求め難く、殊に黄河以北の河南省、山西及び河北南部の資源は、連雲港をして呑吐せしめるのが最も經濟的である。

斯うして、日本にとつては、少くとも連雲港と隴海線とを經濟的に支配することが絶對に必要となり、之が對策を構ずることが必要となる。加之、支那本部の中でも、各種の鑛物資源を均等に埋藏する河南省が、隴海線の貫通によつて如何に其の寶庫たるの機能を發揮し得るかといふことは、思ふだに痛快の極みではないか。

所謂「北支」の南部地方は、青島と連雲港とによるべく、北部地方の貨物の輸出入は、勢ひ秦皇島若くは壺蘆島に完全な築造港灣を新設して、この地方より數條の鐵路を北並に西の方向に敷設延長することを必要とする。

○

たゞその資金誘導の方法に就いては、嘗て滿洲國に對して行はれたものとは、異

つた方針がとられるべきであらう。如何とならば、滿洲國の國家社會主義的乃至國家資本主義的資本誘導方法が、徒らに磨擦多く、建設計劃に幾多の支障を來したことは、今なほ人の記憶に新なものがあるからである。

さりとて滿洲國の經驗に懲りて、資本投下を自由主義的に行はしめることも亦、徒らに無統制の害と、資本濫費の弊とを生ずるのみとなるであらう。

爲政者の三考を冀ふ所以である。

北支教育機關の復活

北支治安の回復と共に、事變によつて閉鎖されて居つた北支教育機關の再起が企てられるのは、固より當然のことである。一時閉鎖せられたる北支各大學の開校さるるもの、或は開校の經濟的能力を缺く私立大學の日本側買收の議などを見聞するにつけても、特に痛感せらるることは、支那に關する限り、從前の如き多數の法文系大學の存在は、百害有つて一利なきことである。

○

北支に於ては、法文系の大學は、官私を通じて一二校有れば足りる。從つて爾餘の各大學は、之を改組して農科、工科、理科、醫科等の自然科學系の大學乃至は專門學校となし、其の卒業生を以て直ちに農林、畜産、工業、鑛業、交通其他の技術

家として支那の富源開發の擔當者たらしめることこそ、最も焦眉にして必須の大事なのである。

又、從來の初級高級の男女各中學は、何れも右に適當して農工商の各種實業學校に改編し、所謂中學の數は之を其の十分の一に削減して差支はない。ばかりか、其の方が寧ろ今後の日支提携への參與者を支那國民の中堅層に獲保する上に於ても最上の方策なのである。

彼の法文系大學の存續を許容して、身に一藝なくして而も大言壯語する處士横議の徒を養成することは、獨り北支のみならず、今後の支那には斷じて許さるべきではないであらう。

○

今や北支教育機關の處置に關して各種の論議、各種の主張の行はれつゝある際である。而も斯かる教育機關の經營運行に際して、日本側の指導扶持が不可缺とされて居る時である。此の秋に當つて日本側に最も必要なる事は、其の對策についての愼重なる態度と、之が爲に派遣する參畫者の嚴重なる人選とであらう。

而して之が局に當る者の自戒を要することは、當局人事の關係を以て臺北帝大に法文學部を設けた、往年の失敗を再び繰返さざることである。

苟くも失職教授や、古手官吏の自薦他薦に左右されて、北支教育機關を彼等の安息所乃至は養老院として提供するが如きことが有つてはならぬ。如何とならば、斯くては折角の曠古の聖業たる今次事變の尊貴を冒瀆し、其の有終の美を汚損することになるからである。

日支兩國の語學教育

北支に臨時政府が出來、中支に維新政府が出來ると、せきを切つた水のやうに、所謂「日支文化の交流」を計らうといふ、先覺の士が、彼方こちに現はれ、果は文化協議會までも生まれて來た。文運日に隆昌、何の異議も文句もあるものではないが、唯一つ、腑に落ちないものがあるので、一言しておきたい。

腑に落ちない一事とは、外でもない、日文文化人によつて提議され、贊成された、兩國の語學教育に關する申し合せである。

其の内容を一言にして盡せば、支那側に於ては從來の三民主義的乃至は英米的排日教育は一切之を徹廢する、語學教育に於ても、英語其の他歐米語に關するものゝ代りに日本語を以てされたい——とした日本側文化人の要求に對し、之に贊成した

支那側の、例へば北支の錢稻孫君の如き——文化人から、日本側に於ても、各級學校に於ける語學教育は、歐米語の代りに支那語を以てするやうに改善せられたいといふ要求が出て、日本側文化人も亦、異議なく之を承認したといふのである。

話も、事柄も、極めて簡單にして且つ明瞭で、今更何の疑義をさしはさむべき餘地も無いかの如くに見える。けれども吾等は、この何の疑義もなきかの如き裡に、陷つてはならない、陷阱のあることを見逃してはなるまい。

それは臨時政府や維新政府の指導者が、口癖のやうに「日本の政治的優越」といふ、その反面に、平等なる要求を持つてゐることの矛盾の裡に胚胎してゐるものの如くに見える。それ故、錢稻孫君等によつて代表せられる語學教育に關する支那側文化人の提議にのみ拘はることは、正當公正ではないかも知れぬが。

支那側が今次事變によつて、今までの態度の一切を改め、東亞共榮の共同目的のために日本と協力しようとするに至つたことは、太だ遲きに過ぎたものではあるが、

なほ本然の道に立ち戻つたものと謂ふことが出來る。併し、其の協力に當つては、東亞の盟主として、先達としての、名も實も兼備した日本の指導的地位を、正當に認識してかゝることは、支那側に課せられた、當然の責任であらう。

そこで、話は今の語學教育に關する支那側の提議であるが、斯かる提議は、少くとも日本を盟主として大東亞を建設せんとする、本來の使命にめざめ、日本の指導的地位を正當に認識した者の言とは言ひ難いものがあるのである。

日本に於ける外國語教育は、ひとり支那語とは言はず、英語その他の敵性國家語と言はず、日本の必要に應じ、日本獨自の立場に於いて之を採り上げて居るのであつて、之に對して他國人の賢しだてなる容喙を許すべきでないことは、固より言を俟たない所である。

而も今日の日本の立場は、東亞ブロックの一たると同時に、其の他のブロックに對しては全部たらねばならぬのである。他のブロックたる獨伊に對しても、乃至は敵性英米に對しても、東亞ブロックを代表する日本が、其の自國に於ける外國語教育に於て、滿洲や支那とは異つた方針を採ることは當然の歸結でなければならぬ。

忌憚なく言ふならば、滿洲や支那は、日本を對象とするのみにても立つてゆく國であるが、日本は之と異り、ブロック内の東亞諸國を對象とする外に、他のブロックの諸國をも對象としてゆかねばならない。必然的使命を持つてゐるのである。この點を正當に認識し把握せざる者は、假令それが如何なる支那人の言であらうとも、耳を借すの必要はあるまい。

因に、筆者は現在日本に於ける外語教育に於ける支那語の地位の低く、歐米語の高位に置かれてゐることには反對であるが、それだからとて、歐米語を引き下げよとなす意見にも反對である。支那語を歐米語並に、或はそれ以上に引き上げる——といふ説をなす者が有れば、双手をあげて之に贊同しようとする者であることを一言附記しておきたい。

日支結婚反對論

杉山平助君が近頃各方面で試みてゐる對支論説の中で、「日本婦人よ支那人と結婚するな」といふ主張は、近來現れる凡百の支那論にもまして傾聽すべき名論であつて、其の結論は筆者等の多年主張して來た所であるから、全然双手をあげて賛成を表する次第である。

元來支那人は、西洋館に住んで支那料理を食つて日本婦人を妻とすることを理想としてゐるのだ相だが、これ程日本婦人を侮辱した話はない。何とならば支那人は其の家庭生活に於いては非常に女權が强かへつた所、例の革命以後、男女同權否女權第一になつてしまひ、家庭的にも社會的にも婦人の地位が高くなりすぎて、益々男の手におへなくなつた。さうした言はゞ嬶天下の國柄である支那の男性が日本の

婦人を見て、之を求めるのは、日本の良妻賢母的な婦德を崇ぶ爲でなくて、之ならば御し易いと見た利己的な打算から出てゐるのである。

杉山君によつて指摘された支那人と結婚して不幸な目に遭つてゐる日本婦人のことに就いて、柯政和といふ日本婦人と結婚した支那人が最近そんなことはないと言つて大いに反駁努めてゐる樣だが、筆者の知る限りに於いても、支那人と結婚した日本婦人は例外なく不幸であるし、其の混血兒も亦不幸に陷つてゐて、どうやら平凡にでも暮して行つてゐる者は、亭主の支那人が日本によつて——日本の會社や官廳に雇はれることによつて——生活してゐる場合の外は斷じてない樣である。こゝに日本婦人と結婚する支那人の打算があり、利己的な動機があり、特に日本婦人の爲の危險がある。

柯政和君は、例の文教使節として日支交戰の唯なかに悠々東京を訪づれた男である。日本以外にその衣食と生命とを保證して吳れる國を持たぬ彼が、日本婦人と結

婚して之を大切にするのは、それこそ「アッタリマエデセウ」と言ふものである。それだからと言つて、日本婦人が支那人と結婚していゝといふことにはならない。

まして、日支親善は兩國民の骨肉的結合からで、其の仲に生れた愛の結晶によつて眞の日支提携が出來るなどとは飛んでもない了簡ちがひといふもの。血のつながり位で兩國が親善出來たら、ポーランドは露獨に分れて戰ふこともなかつたらうし、イタリーが佛蘭西に反抗する三國同盟に奔ることもなかつたらしう、或は英、獨が皇帝の叔甥といふ仲であり乍ら死力を竭して戰ふこともなかつた筈ではないか。

又、あの非衞生極まる中で乳幼兒の半分以上に死なれ、流行病や大旱洪水で大量の死亡者を出しつゝ尙增加してゆく支那人と結合して、日本人が出來ると考へる者が有りとすれば、それは多分馬鹿か氣狂であらう。西洋犬が輸入されてから、日本の犬はみな耳を垂れる樣になつたのである。それまでは野良犬でも何でも、苟くも日本の犬は、盡く耳を立ててゐたものである。考へなければならぬ。

漢字廢止論の退却

今度の事變で我が國の學界には大きな變化が起つた。唯物論の雲散、自由主義の霧消等々、その昔を知るものは蓋し隔世の感あるに愕然たるを覺えるであらう。その中に、漢字廢止論の退却といふ一事がある。

去る戰時議會の貴族院に、質問權を濫用してローマ字の何式に據るべきやをクドクドのべた某議員の演說が、世の物笑ひを招いただけでも、往年の漢字廢止論、ローマ字論、カナ文字論華やかなりし當時に比べ、隔世の感があるのである。

大體、漢字が難かしい等といふことが、教育家の中から唱へられて、其の論に文部省が動かされるなどといふことが、不見識極まる話であつたのである。

何故なら、教育家が漢字が難かしくて教へられぬと自供するなら、それは教育家

たる資格なきことを告白したもので、難かしいのを難かしくない迄に教へるのが教育家の任務なのだから、それが出來ぬものは、どん〳〵教壇から去つてゆくべきであつたのである。文部省も亦、そんな連中からはドシ〳〵免許狀を取上げるべきだつたのである。

○

所が漢字といふのは、我が世界的支那學者佐伯好郎氏が既に三十餘年前に喝破してゐる如く、東亞のエスペラントなのである。言語は相通じなくとも、現に日滿支の三國人は、これ有るが爲に通ずるものを持つてゐる。

さうした理論は拔きにしても、日滿支三國の眞の提携の爲には、如何しても無くてはならぬ唯一の鍵が、此の漢字なのである。

今度の事變は其の事を事實を以て證明したのである。漢字廢止乃至は制限を主張した新聞雜誌が、次から次へと活字を鑄造しなければ、一頁の新聞も、半冊の雜誌も發行出來なくなつた事實は、百の漢字廢止論、千萬の制限論にもまさる雄辯である。議論は論ずる者によつて左右されることがあつても、事實は遂に動かないこと、以て知るべきであらう。

寔に漢字廢止論は退却したのである。そして漢字必須の時代が來たのである。

日本が東亞の盟主たるの地位を放擲せざる限り、此の事變を機として愈々漢字により、漢字に賴らねばならなくなつたのである。假名文字では解決出來ぬ國策をとつたのである。ましてローマ字――ローマ字に日本式ローマ字といふ妙な國粹派のあることの嗤ふべきは玆では言はぬ――論の如きは、消えて無くなるべき時が來たのである。

對支工作の至難

言ふ迄もなく一切の對外政策の遂行に當つて、國內に對立相剋を有らしめるべきではない。假令またさうしたものが有つても、之を相手側の前に暴露するが如きことは、嚴に相戒めねばならぬ。如何とならば、苟くも對外問題に關する限り、之をめぐつて兄弟墻に鬩ぎつゝあるかの如き印象を相手側に與へることは、直ちに以て當該政策の遂行にとつて妨害となるからである。之が國內的の問題ならば是々非々の論議が許される場合でも、事の對外政策、殊に一旦決定を見たる具體策に關しては、其の論議には十二分の愼重を期さねばならぬこと亦言を俟たぬ。

○

現に對支諸政策の遂行に關し、自薦運動に失敗した者共が、同政策の中心勢力に向つては勿論、あらゆる機會を通じて先任者排擊の策動を深刻につゞけてゐる事實があるが、之が支那側要人及一般支那人に、一あつて二なかるべき我が對支國策に諸種の對立相剋の存するかの如き印象を與へ、彼等に其の歸往と信憑の目標に不安を抱かせつゝあるは見逃し難い所であらう。而も此の事が如何に我國にとつて不利益なるかに關して縷言の要はないであらう。

○

例を對支文化工作にとつて見ても、之が實際的遂行者を自任する個人並びに團體は夥しかつたが、兎に角當該工作の擔當者として先遣された新民學院並に師範學院への參加邦人の人選には、さしたる無理はなかつた。然るに纔かに派遣を見た數名の邦人幹部の方策及び人選乃至は個人の云爲に對し、早くも喧ましき誹謗の聲をきくのである。而して斯かる誹謗が支那人の間から起つたものに非ずして、却て同胞中嘗て其の地位を獲んと欲して成らざりし人々の口から、無責任なる放言として吐

かれつつあるのは特に反省を要するが。斯の人々は、其の放言が如何に支那人に反映し、如何に我が對支文化工作の進展を妨害するかを知らざるに非ずして、知りつつ而も己れを主張するの急に驅られて、之を省みるの餘裕を失つて居るのである。

○

支那事變によつて國民に要求されつゝある擧國一致體制は、ひとり國内的にのみ必要なるものではなく、對外的にこそ一層緊急必須のものなることを特に提言したい。對外諸政策の遂行に關する限りは、飽くまで擧國一致の支持支援を以て進み、苟くも相手側をして其の何れに從ひ、其の何れを信ずべきかに迷はしむるが如きこと無きを期さねばならない。

對支工作の至難は、あらゆる機會、あらゆる場所に於いて叫ばれつゝあるが、其の至難なる所以が、支那側に在らずして却つて國内的に存することに、我々は注意を怠つてはならぬ。

支那の傳統を利用せよ

中華民國臨時政府並に同維新政府の誕生と共に、我が對支國策は既に論議の時代を過ぎて愈々遂行の時期に這入つたものといつて差障はない。然るに之が實際的遂行者の云爲を見る時、遺憾ながら彼等の多くが根本的に對支認識を誤まり、之が爲に東亜百年の禍根を培ひつゝあるやの感なきを得ない。

現在對支國策遂行の擔當者として、勇敢なる將兵諸君によつて治安を確保された北支中支の各地に進出して行つた者の多くは、固より東亜百年の禍根を蒔きに行つて居るとは夢にも思つては居ないであらう。がしかし、事實は彼等の夢想だにせぬ結果を生みつゝあるを如何せん。

我が對支國策の具現化の一として、經濟開發なり文化開發なりの爲に支那に赴い

た諸君が、支那を見ること恰も滿洲の如く、甚しき者に至つては全然日本同樣に之を律してゆかうとしてゐるのである。

○

言ふ迄もなく支那は、其の人口の稠密に於て、人智の進歩に於て、其の有する文化施設に於て、今尙ほ未開の域を脱せずとはいへ、之を建國以前の滿洲に比較すれば、兎に角數日の長を有してゐるのである。從つて對支國策の實施に當つては、從前の基礎の上に打ち立てゝ行かねばならぬのである。然るに此の點に關する十分なる認識と用意とを缺如しては、當事者の意圖の如何に拘らず、對支國策の成果は期し難いであらう。

卽ち、對支國策の成否は、支那並に支那人が有する傳統を、如何に巧に利用するかに係つてゐる。而して之が局に當る者に要求されることは、當然支那並に支那人の傳統を理解する爲の十全の努力でなければならぬ。然るに、當事者中に斯かる努力を怠り、支那を滿洲と同樣に看做し、或は支那を日本の延長として取扱ひつゝある者、支那人を日本人同樣に扱ひつゝある者の多きを見るのは、十分に考慮を要する筈である。

○

もと〳〵我國人は官民ともに殆ど前述の如き努力を拂つた經驗を有して居らず、僅かに支那語を解するか、或は支那に在住するかの、何れか乃至は兩方を兼ねて居れば、自他共に支那通と稱することを得たのであるから、直ちに現在の對支國策遂行者を責めることは出來ぬかも知れぬが、要は、支那に於ける我が工作の一切は、支那並に支那人が有する傳統を無視してはならぬと言ふことを十分に記憶してかゝれば足りるといふことなのである。徒らに人を求むるの急なるに眩惑されて、死馬に千金を投じたり、或は現地に於ける拙速主義に興奮して、禍根を千載に遺すが如きことは、嚴に戒めねばならぬ。

支那人を甘やかす勿れ

支那は昔から封建的な國柄であるだけに、國民大衆も亦頗る封建的な差別待遇に馴らされてゐるから、うつかり日本式に乃至は歐米式にデモクラシーでゆかうものなら、飛んでもない失敗を仕出かしてしまふ。

例へば日本の學者が北京あたりへ旅行にゆくとする。琉璃廠あたりの本屋がワンサとホテルへ殺到して來る。すると日本の學者先生は下手な支那語で「どうぞおかけ下さい」だの、「お茶を一つ」だのと言つて、應酬これ努める。日本でなら何でもない當然のことだが、支那ではこれがいけないのである。

斯んな時、支那の學者はどうするかといふに、自分は椅子にかけてゐて、本屋は立つたまゝ、自分はうまさうに茶をのんでゐるが本屋にはそれを與へない。學者と本屋では、一方が士、一方は商で、階級がちがふからである。これが支那の習慣であり、これが支那の傳統なのである。日本でなら、そんな習慣を打破して呉れゝば相手は感激してしまふ、平民的だの何だのと言つて打ち込んでも來る。所が支那ではさうは行かぬ、下の者が上を舐めてかゝる、與し易しと見てとつて、益々増長して來る。今次事變前までの排日侮日の種は、多く斯うした日本人の善意に發した差別待遇撤廢の、一視同仁から起つてゐることは、特に心しなければならぬ。

○

所で、北支中支に於ける我が占領區域に於いて、今や各種の支那人に接しつゝある日本人の多くが、軍民共に彼等を視ること恰も鄕里の隣人を見るが如くに理解と同情と援助とを吝まないでゐるのは、流石に日本人らしい心やりとして我等は思はず膝を打つて居る者である。が然し乍ら相手が支那人であるが爲に、却て思はざる禍根を殘すのではないかといふ憂ひなしには見て居られないのである。直言すれば

今次事變を契機として日本に近づいて來た所謂親日支那人は甘やかされてゐるのである。彼等が古來の習慣を無視した、日本軍民の寛仁になれ切つて、愈々增長するのではないかと疑はれる節が、次第に露骨になつて來たからである。

○

本國に於ては顧みる者もなかつた教員が、文教使節として日本を訪づれ、日本側の一視同仁のお蔭で、日本學界の元老耆宿と對等で話が出來た爲に、直ちに日本の學界を甘く見て、早くも日本人を指導しようといふ不遜な考へを起して來てゐるのである。ひとり維新政府の〇〇〇氏だけが、日本人以上の我儘を言ひ出してゐるのではない。此の儘で行けば、支那人の全部が何を言ひ出すか分らぬのである。我等はさうならぬ以前に、斯かる驕兒の出現を斷つ爲に、依然支那では支那式に、日本人と彼等との間に嚴乎たる差別を設け、彼等をして秋毫と雖も之を犯すことなからしめねばならぬ。支那人遂に日本人ではないからである。

日本は第一、支那は第二

初めに忌憚なく言へば、今次の支那事變は日本並に日本人の爲に戰つてゐるのであつて、支那や支那人の爲に戰つてゐるのではないのである。

此の事は、今次事變によつて支那や支那人が塗炭の苦しみから免れ得るといふことと、少しも矛盾を生ずるものではない。これによつて日本と日本人が躍進し、之によつて支那と支那人が繁榮し得るからである。

○

我々は今日までの戰果を顧み、我が忠勇義烈の將士諸君の辛勞に對しては滿腔の謝意を捧げても尙不足なるを憾みとする。斯く戰鬪部面に於ては世界史に比類なき効果をあげたその反面、敵の抵抗絕えた占領地區が、一度び軍の手から各種の工作

班の手に渡ると、實に寒心すべく憂慮すべき幾多の事例を見るのである。

○

其の一つに、占領地區の支那民衆の歸服を急ぐの餘り、皇軍と國民黨とを同列に置き、民衆に向つて皇軍と黨軍の比較說明をして廻る役目の者が出來て高碌を喰むといふ、嘘の樣な狀態になつてゐる。そして皇軍の仁慈を知らしめる爲と稱して、先祖代々粟の粥も碌々すゝつたことのない支那人に米の飯を食はせてやつてゐる。此の事が日本や支那の爲になるならまだよい、然るに之が日本の爲には勿論、支那の爲にもならないのである。

支那の農民達には、今まで一杯より食はなかつた粟のかゆを二杯食はせてやればそれでよいのである。何も米の飯を食はせるには及ばないのである。殊に日本はそれをする程、國民上下が飽食してゐるのではないのだ、まして皇軍將士諸君が屍山血河を越へて進軍して行つた土地で、皇軍と國民黨軍閥とを比較對照して支那民衆の人氣を買はうなどとは、飛んでもない陋策であるばかりか、實に皇軍に對する冒瀆でさへあり得る。そんな方策を執る以外に日本と皇軍の正義を民衆に傳へることの出來ぬ宣撫班員は、卽刻罷免した方が日本の爲にも亦支那の爲にもなる。

○

現地宣撫の諸君は猶、勞苦身を以て當つて居る。然るに內地に居て新民主義だ、日支一如だなどといふ悠長極まる空論家達の言論に至つては、日本の爲にも支那の爲にも千害萬害こそあれ一利もないといふことを特に大聲疾呼したい。此の徒の言によると今次戰爭の目的は、日本の爲より支那、支那人の爲に戰つてやつてゐる樣なことになり、其の爲には日本及日本人は一切の不自由を忍べといふのである。

冗談ぢやない。今次事變は第一に日本及日本人の爲の戰でなくて如何する。而して我々は支那及支那人が其の餘慶に浴することをこそ望んでゐるのである。

利するものは支那なり

支那事變に對する國民の覺悟を强調する爲と思はれるが、一部識者の中では、今次事變が片付いて、支那に親日政權が確立してしまへば、經濟的にも軍事的にも日本が非常な利益を享受する樣なことが言はれてゐる。

如何にも日滿支三國の、所謂東亞ブロックが確立すれば、日本は從前に比べては多大の利益を享受するだらう。しかしそれはブロック經濟の本質からして當然のことなので、それ位の利益は、日本が古來支那の爲に拂ひ、現に拂ひつゝある人的物的の犧牲から考へれば、九牛の一毛だに値せぬと謂つていい。

○

滿洲を東亞の寶庫だといふ考へは最近大いに是正されて來てゐるが、あれも——そんな寶庫を日本がとつたんだ——として反日感情を激化させるのに使つた國民政府の內外に對する宣傳が大きい役割を果してゐる。北支資源といふのも、國民政府によつて、其の實際的價値以上に高く內外に宣傳され、世界の日本に對する嫉妬心をあふつてゐるのである。

さなきだに支那人は、屢次の排日貨運動でも分る樣に、日本は支那に依存して立つてゐるといふ樣な錯覺を起してゐたのである。そこへ前述の如き日本の識者が、今次事變で日本だけが利益を享受する樣なことを言ふのは、思はざるの甚だしいものと言はざるを得ない。

○

我等は、今次事變によつて利する者は、日本や日本人に非ずして却て支那並に支那人であることを指摘したい。多額の資本と多大の技術と、多數の努力と多年の忍耐と、さうした一切の犧牲を忍んで開發を行はなければ、三文の價値なき北支の所

謂資源を、開發して貰つた上に、其の物資の市場を永久不變に確保して貰ふ支那が、之に犧牲を拂ひ、開發し、確保してやる日本よりも不利益だと如何して言ふのか。

○

支那がまともな國でさへあれば、今次の事變などは起る筈はなかつたのである。それが、さうでないばつかりに日本は非常な迷惑と非常な犧牲とを忍ばねばならないのである。今次事變は第一に日本自からの爲に、今後の迷惑と犧牲とを少くすることに役立たせねばならぬが、それだからと言つて支那や支那人の不利になつてゐるのではないのである。我等は今次事變を意義づけるに道義一點張りの神がかり主義者に反對する。と同時に利のみを以てせんとする一部識者の論議にも反對せざるを得ない。況や其の利を受くる者を日本のみとなし、支那の之に與からざるが如き印象を與へる論議に對してをや――である。

北京に入りて

昭和八年に北京を去つた時から數ふれば、恰度五年目の入京であるが、故都北京の面影は昔乍らに存し、一木一宇、ことごとくが、昔のまゝに我を迎ふる嬉しさなつかしさ。北京ホテルの屋上から望み見た果しなき綠、嘗て夢多き青春の日を送り且つ迎えた故都北京。

扨、足を一歩街頭に入れると、街には邦人のハンランである。浴衣である、素足である。日本語と支那語のコンデンスされた言葉である。カッフェ某、割烹某である。一見して日本國力の伸展と邦人進出の跡が見えて、皮肉でなしに日本人である喜びを感じたことである。がしかし、北京は日本化したのであるかどうか、といふに、管見を以てすれば決して日本化してはゐないのである。むしろ日本化した樣に

見えるのは、わづかに其の表面だけだといふことを、お互ひに忘れてはならぬと思ふのである。北京の日本化は水の面にひろがつた油だといへる。表面から見てそれが油の海に見えても、本質は水なのである。北京の日本化はまた、大洋の波濤だとも言へる。日本の勢力、日本人の進出で搔きまわされたと思つても、それは表面だけだ、底は千古の靜ヒッに在るのだと思ふ。

油が消え、波浪が靜まつた時に處する日本國民としての態度が、肚が、在北京同胞のお互ひに出來てゐるのか如何。往年二千人そこ〳〵だつた居留民が、僅か一年やそこらで一躍二萬人になつたといふ樣な統計では、仕事の出來なくなる時の來るのを豫想してゐる人が果してあるかどうかである。その態度、その肚、その豫想の確乎たることに於いて、私は事變以前から北京に在住する老北京——を尊敬せよと言ひたい。其の說に從ひ、其の言に聞けと言ひたいのである。

例へて言はうなら、在北京同胞は此次事變を楔機として、北京村村民から一躍して北京市市民になつたのである。北京町の時代を知らぬのである。ネヂ鉢卷からシルクハットに飛び超えたのである。ともすれば鉢卷當時の癖が出て、シルクハットで汗を拭かうなどといふ無ざまを犯すのである。玆に、お互ひ同胞の大きな危險がある——と私は思ふ。

對支那人の態度にしても、支那人を人と思はぬ傲慢さは去つていい。さうでないと、折角勇猛無比の我が皇軍將兵諸君によつて打ち樹てられた戰果を、內部からフイにする樣なことになりはしまいか——と私は恐れる。

入京後の感想は迚も斯の種の短文のよくする所ではない。たゞ北京に入つてそこにすむ人々を見て——忠言などといふ不遜な量見からでなくて、心からお願ひしたいことを一言誌して本稿を結びたいと思ふ。それは

日本から來た同胞が日本人であることを恥とせねばならぬ樣なことを敢てせぬ樣にして頂きたい——といふことである。

北支に入りて

昭和十三年の七月末日より九月まで鮮滿各地を巡視して北支に入り、つぶさに北京天津を中心とする北支の現狀を視察した筆者は、平生口に筆に主張しつゞけて來た所論に、毫末の訂正をも必要としない事實を目のあたりに看て、私かに先見を誇ると共に、一片皎々の憂心、國家を憂ふるの情に堪へないものがある。

嘗て筆者が他の欄に於て之を指摘した如く、支那全土は皇軍將兵によつて聖戰がつゞけられてゐる戰地なのである。北支も亦其の例外をなすものではない。然るに其の事實を無視して文化工作と謂ひ、經濟工作といひ、甚だしきは皇軍慰問に美名を藉りて私利を圖らんとするの徒が、何とわが朝野に夥しいことであらうか。

○

現に一億五千萬を超ゆるといふ北支の支那人に對し、戰鬪行爲以外の宣撫から治安維持にまで、その精力を二分し三分しなければならぬ現地陸軍の將兵諸君の辛勞を思へば、銃後國民は個人や團體の私的な利益を圖るより先に、宣撫なり、治安維持なりの後方勤務をこそ分擔すべきだと思ふのである。斯くしてこそ將兵諸君には本然の戰鬪部門に專念して貫ふことが出來、軍民一致眞に非常時局の克服も出來ようといふものである。然るに戰鬪行爲は勿論、宣撫工作から治安の維持まで、一切を現地軍部に押しつけて、圖るは唯私的な利權のみといふ人間が、朝にも野にも充滿してゐる處に筆者の憂ひがあり、憤りが有るのである。筆者の憂憤は如何でもなるが、現地軍部の諸君の責任の過重を如何にするか——である。

○

北支一億五千萬の民衆と言つても、從來の支那では、良い支那人と惡い支那人の區別が判然とついて居つた。國家としての體裁は成さずとも、支那特有の社會的規

矩があつたからである。然るに事變後の唯今では、その社會的規矩が麻のやうに亂れはて、どれが良い支那人か、惡い支那人かの區別が全然つかなくなつてしまつてゐる。換言すれば誰が排日抗日をする人間かといふ區別がつかなくなつてゐるのである。こゝに宣撫工作や治安維持に膺つてゐる人々の辛勞と、其の任務の至難さがあるのである。

筆者が北支に入り、第一に銃後の國民に傳へたいと思ふのは、一切の企圖や工作は後廻しにせよ、そして專ら宣撫工作、治安維持に協力せよといふ事である。政府も亦畫餅に等しき開發會社設立に懸命になるより、宣撫員宣撫官の派遣に本氣になれ――といひたいことである。現下の日本は一人の大臣の失職を憂ふるよりも、戰地に於ける一人の將士の勞力をも輕からしめることを努むべきであるからである。

山西炭の利用方法

北支の資源の中で、最も重要なものは、言ふまでもない「石炭」であつて、山西、河北・山東の三省に存在する埋藏量は、まさに天文學的數字を以て計算する程の莫大なるものがある。それ故、之が利用方法は、今後のあらゆる支那の經濟開發案中最大のものであると謂はざるを得ない。

然るに現在これ等の石炭資源中、稼行して實際に收益をあげつゝあるものは、河北の開灤炭坑、山東の博山、淄川その他少數のものがあるのに過ぎない。

思ふに、これ等の鑛區は、何れも採掘が甚だ容易であり、採炭地に於ける生產費は極度に低廉ではあるが、奈何せん、これより海港に至るまでの運輸費に多額を要して、經濟的に採算のとれないものが多い爲である。尤も開灤・山東の諸鑛山は、

その例外をなしてゐるが。

將來、交通機關、殊に鐵道や港灣が改善せられるに至つたならば、山西・察哈爾・河南の石炭も、石炭そのものとして經濟的に採掘することが出來るやうになるであらうが、現在の交通情態では、大部分が「無價値な寶庫」たるに止まるのみである。

特に山西炭に於ては、さうであると謂へるばかりか、將來此の地に重工業の大なる發展の見込みも有りさうには考へられない情態にある。

蓋し、山西省は地勢の關係上、外部の諸省との間に運輸費が嵩むがために、山西モンロー主義の下に於てこそ、其の石炭を利用して自給自足に必要な程度の工業建設をなし得たものであるが、今後山西省が外部に開放せられるに至つた曉にでも、石炭以外には餘りに有利な條件を備へてゐない既設の省營工業は、大部分崩壞するものと見なければなるまい。

それ故、山西省の石炭に就いては、現地に於て各種の重工業を建設して之を利用するといふやうな案は、案外に望み寡いものと謂はざるを得ないのである。

さればとて、此の大寶庫を此のまゝに放置することは、最大の損失であることは言を俟たない所であつて、何等かの方法に依つて之を利用することが必要である。

管見に從へば、山西炭利用の唯一にして而も緊要な方法は、到る處、殆んど無原價同樣に獲られる點を利用して、こゝに一大石炭液化事業を建設することである。

卽ち山西炭の液化によつて、北支並に滿洲及び日本內地の、軍事的、平和的各種事業に必要な石油の、少くとも半を獲得することを期さねばならぬと考へるのである。

此の點、山西炭の利用は、撫順の頁岩の利用よりも、(一)炭質の良好であること、(二)採掘の容易であること、(三)炭層の遍在してゐること、(四)勞働賃銀の低廉であること等有利な條件を兼備してゐるから、生產費もまた低廉なことを期待することが出來るのである。唯一の障碍は、液化された石油を沿岸地方に輸送する運賃の

點に於いて、撫順の液化事業に比べてフレントなるやも計られないといふことである。

けれども、山西現地に於ける液化石油は、將來大陸、特に北支に於ける日本空軍の中心根據地ともなるべき地理的關係を考へれば、現地に於いて此の目的のために使用せられるものゝ多量に上るべきことは、想像に難からぬ所であつて、この點は特に有利であらうと確信するのである。

たゞ問題となるのは、此の現地空軍の需要を充した殘餘の液化石油の處置に關するものであつて、此の餘剩を鐵道を以て輸送することは、自然石油に比して、さなきだに高價な液化石油の價格を徒らに高めることゝなり、經濟的には一層採算のとれない事業となるに至るであらう。

斯うした矛盾を解決するためには、液化された石油を鐵道油槽列車以外の、それよりも遙か低廉な、特殊の輸送方法を案出することが必要なのである。

其の方法は、液化の作業場から、海岸の如何なる場所にでも、自由且つ低廉に輸送することが出來る送油管を敷設する以外にはないであらう。

既にアメリカに於いては、送油管の延長十萬哩を超え、これのみに投下せられた資本は十億弗以上に上つてゐる。イラク及びペルシャの石油もまた、それ〴〵地中海沿岸の二港並にペルシャ灣頭の港に送油管を以て流送されつゝあつて、前者の如きは延長千數百哩にも及んでゐる。コーカサスとバクーの產油もまた、コーカサス山脈に沿つて敷設せられた送油管によつて、黑海沿岸に送致されてゐるが、これ等は實に石油輸送が送油管敷設以外に、よき方法が無いためである。

而も、送油管の設備は、直徑十吋內外の鐵管に、四五十哩毎にポンプ送油所を設けるだけで足り、之が經費も、アメリカの例に徵すれば、一哩につき二三千圓で充分な見込みであるから、山西——太沽間を三百哩として、凡そ六十萬乃至九十萬圓に過ぎない費用を以て敷設することが出來、而も此の一本によつて無限に多量の液

化石油の輸送を行ふことが出來るのである。

是に於いて、筆者は、寧ろ滿洲に於ける液化事業を制限して、主力を山西に注ぐべきことを主張せざるを得ないのである。日本が、現在程度の高價な石油價格を維持するだけの決心が有るならば、東亞經濟ブロック全體が必要とする石油の半以上を、此の源泉によつて充し得ることは、單なる空想ではないと確信する。

併しながら、此の事業たるや、全體として頗る多額の費用を必要とするばかりでなく、なほ資本主義的には容易に收益力を有するまでには至るまいことは、前もつて豫想してかかるべきであらう。さればとて、本事業は軍事的には絶對不可缺の大事業であることに於いては、何人と雖も異議を挾む餘地のない大事業であるから、本事業の完成のためには、よろしく國家資本を適當に動員し、之を根幹として、一大專門の國策會社を設立する位の意氣込みを以てかゝらねばなるまい。即ち所謂「國家資本主義」は、斯うした分野に於てのみは、許容せられるわけである。

石炭以外の北支物資

北支天然資源の中、鐵は最も重要なものの一つであつて、其の最も確實な埋藏量は、約一億噸と考へられるのである。

然るに筆者は、之に對しては世の論者の多くが有望なりと呼號してゐるのとは反對に、之に多くを期待すべからずといふ斷言を下さざるを得ないことを、最も遺憾とするものである。如何とならば、北支の鐵鑛の性質は餘り良好ではなく、純分もまた五五パーセントを出づるものがなく、北支に於いて適地を物色して、現地に於いて製鐵せしめるのでなければ、到底採算がとれないが爲である。

從つて、他日交通機關の改善せられるのを待ち、現地に於いて製鐵事業に當らしめたならば、相當以上の成績は擧げ得られるものと考へられる。

次に注意すべきものは、羊毛資源の開發と西北の重要性である。言ふまでもなく、日本の南進成就の後まで、わが國の需要する羊毛もまた、大部分を北支から仰ぐものと考へなければならぬ。

然るに、支那に於ける羊毛の產地として、最も有力なものは、所謂北支五省ではなくして、寧ろ青海・甘肅・寧夏の各省である。此の羊毛は、從來包頭より京綏線によつて搬出せられ、其の特殊な品質のために、わが國には向かず、主としてアメリカやドイツに其の販路を有して居つたものであるが、今後はわが國の羊毛原料に適するやうに、綿羊の改種を行はねばならぬことは勿論、從來は羊皮船で黃河を運出して居つた小規模にしても而も幼稚な輸送方法も、包頭より黃河に沿つて南下する鐵道、並びに京綏線の延長を、少くとも蘭州まで急速に敷設し、蘭州と隴海線ともまた早急に結ぶ等、專ら鐵道による輸送網を完備することを必要とする。

これこそ、筆者等が今次の事變を機として、わが政府當局が所謂北支五省に拘泥することなく、前記の三省を少くとも經濟的にはわが支配下に置くことの出來るやう、萬全の努力を拂はれんことを要望する所以の一つである。因に筆者は東亞經濟ブロック完成の爲にも、所謂北支五省論者に反對しようと欲する者である。

なほいま一つ、北支三大資源の一といはれる鹽について一言すれば、此の鹽業にもまた日本の手によつて改善せられるべき多くのものが存してゐる。

例へば、從來專ら鹽稅行政の關係上、輸出不可能の情態に在つた長蘆鹽であるから、之が鹽稅の大幅引き下げを斷行せしめて、鹽を原料とするわが國化學工業の需要を充たすことを要し、棉花と同じく賦課されて居つた關稅もまた撤廢せしめ、更に業者をして技術的、經濟的に之を援助して、生產額の大々的增加を圖らしめることを緊要とするのである。殊に鹽稅は、支那に於ては從來、人民の膏血を絞る苦汗稅であつたものであるから、之を除くことだけでも、既に歷代各種の政權に比べて、北支新政權が善政を布いた證據とすることが出來ると確信するのである。

支那人の自尊性

或る支那人が日本に來る時、船があの風光明媚な瀬戸内海にさしかゝつたので、同行の一邦人が「何と我が國の風景は美しいではないか」と言つて誇ると、其の支那人が恬然として言つた、「耕シテ山顛ニ至ル、國ノ貧シキコト知ルベキノミ」と。つまり、山の頂上まで耕してゐる、お前の國の貧しいのはこれだけでも知れる——と言つたのである。そしてその支那人は〝自分の國こそ土地廣く物産が多い〟と言つて豪然として誇つたといふ。

斯の様に支那人の自尊心といふものは凄まじいのである。自からを知らず又他を知らざること斯の如き態度が、支那と支那人とを滅亡に導いて行つたことは周知の通り、其の傲慢は憎むべく其の愚盲は嗤ふべきであらう。然しこれが隣國でないフ

ランスやイギリスならば、憎んだり嗤つたりした儘で、それですむであらうが、相手が隣國支那だけに、其の傲慢を叩き其の愚盲を啓いてやらねばならぬ責任とも使命とも云ふべきものを擔つてゐるのだから、日本の仕事も亦重大となるのである。

○

支那人の傲慢と愚盲は、軍事的には勇猛果敢な、我が將兵諸君の力戰によつて完全に叩き潰されて剩す所がない。が、文化的には今なほ前途の遼遠なるを思はしめるのである。筆者は東京在留の滿洲支那の學生に接してゐて常に、痛感してゐるのであるが、滿洲國の留學生にしても支那の留學生にしても、日本の自然科學の進歩には敬意を表してゐても、日本の法文經政等の一般的な文化科學に對しては、寧ろ輕蔑を感じてゐるらしいのである。

彼等が折角日本に留學し、日本の大學に這入つても、其處の敎壇で講ぜられてゐるのは、常に歐米其の儘乃至は歐米の下手な直譯が紹述されてゐるだけなのである。

それ故、從來の支那や滿洲の留學生といふものは、日本の大學に這入つて、初めて「歐米の尊崇すべく、日本の輕蔑すべきを學んで」歸つて行つたのである。從つて彼等に悔日思想を植ゑつけた者が有りとすれば、蔣介石の國民政府よりも、寧ろ日本の大學教授達であつたといつても決して過言ではなかつたのである。

そこで、今後支那人の傲慢自尊を文化的に叩きのめして再出發させる爲にも、日本の文化人が日本的なるものの把持を焦眉とする。日本的或ひは東洋的を呼號し乍ら、而も新民主義などといふ儒教の教理を勿體ぶつて理論づけるのにキリ〳〵舞ひをしてゐるのでは、益〻日本文化の貧困性を告白して、支那人の自尊性に油をかけ、支那人の傲慢と愚盲を助長させるものである。迚も此の徒によつて文化的に支那と提携することは望めない。まして支那を指導するなどといふことは、全く絶望と言ふも憚らない所である。

日章旗と支那人

「日本人學生を放逐せよ」と黑板一杯の樂書である。場所は北京大學第一院國文系の教室で、時は昭和六年十月のある日。

所が、滿洲を席捲した日本軍が、今にも北京にまで攻め寄せて來るといふ風評が立ちはじめると、もうバッタリとさうした樂書は跡を絶つてしまひ、今まで白眼で我々を睨んでゐた支那人學生の眼が、俄かに和やかになつて、見も知らぬ學生が親しさうに近づいて來て、

「お國の軍隊は何時北京に入城するのかニイ」

と言つたり、

「何時でもいいから日本の國旗を一本呉れないか」

と賴んだりする樣になつた。

○

同じく其の頃。出入りの本屋で、琉璃廠の來薫閣の主人と言へば、日本人にも知られた親爺が、矢張り日本軍の北京入城の日取りを訊きに來た。

「知らんねえ。そんなこと訊いて一體どうするのだい」

と言ふと、彼は頭をかき乍ら、下僕の樣な卑屈な笑顔を見せて、

「手前共の店でも、打倒日本だ、對日經濟絶交だ、誓而不賣仇貨（日本品）だのとベタベタ店頭にビラを貼つて居りますんで、へイ。若しもお國の軍隊の入城が本當とすれば、早速あれをはがして日軍大歡迎の貼紙をしたいと思ひまして、それで先生の所へお尋ねに上つた樣な譯でござんす」

と言つた。

○

今度の事變で、ニュース映畫や、ニュース寫眞を見て、あの半紙の上に梅干をのつけた樣な手製の日章旗を打ち振つてゐる支那民衆を見て、說明者のいふ「簞食壺漿して皇軍を迎へました」を、其の通りであらうとは思ひ乍ら、私は妙に嘗ての北京大學の學生や、來薫閣の親父の、卑屈な內に不貞々々しさを包んだ顏付きを思ひ出すのである。

○

現に此の春、軍の飛行機に乘せられて石家莊まで行つた先輩の歸來談によると、其の先輩の乘つた飛行機が石家莊につくと、今まで各民家に立てられてあつた日章旗が何時の間にか影をかくして、其の代りに青天白日旗や滿地紅旗がヘンポンと飜へり出した。後で聞いて見て「今ついた飛行機は蔣介石の飛行機だ」といふデマが飛んで、斯くは國旗の揚げ替へとなつたことが判つた——といふことである。

○

何しろ朝に甲軍閥を歡迎し夕に乙軍閥を歡迎し、翌朝は更に丙軍閥を歡迎してゐた支那民衆である。強者を歡迎することには言はゞ慣れてゐるのである。そして叩かれても儲けることを、負けても勝つことをねらつてゐるのである。爰に支那人の狡猾さがあり、對支工作をなす日本人の危險がある。日本人的な意氣や純情に動くべく、絶無とは言はざるも、殆んど全ての相手が宿場女郎の様にすれッ枯しになつてゐるのである。それと今後一緒になつて世帶を持つて行かねばならぬ運命を背負つた日本なのだから、全く何の因果かといふものである。

それにしても、勝つてゐて負けることのない覺悟だけは、日本人の皆が皆持つてゐなくてはなまい。

日本婦人と支那語

聞いて居て思はず吹き出させるものゝ一つに、外國人の日本語がある。最近國民が接した外國人の日本語の尤なるものは、過日來邦した伊太利訪日使節團長パウルッチ侯の「アリガトゴザイマス」や「ダイニッポンバンザイ」といふ片言隻句であり、更に同國經濟使節團の婦人や、北支那から來た親日婦人使節一行の語つた日本語挨拶である。それらは皆、外國人特有の妙なアクセントを帶びてゐて、當の本人が眞面目であればあるだけ、之を聞く我々日本人を吹き出させずには置かぬものであつた。と言つて、我々日本人は、その外國人を輕蔑出來たか如何かと言ふに、輕蔑どころか、寧ろ一入の好感と懷かしさとを覺えたことである。

○

伊太利の使節に關しては暫く之を論じまい、玆で考へたいのは、北支名流婦人をすぐつて來た支那の婦人親善使一行が、我國婦人連の歡待に會ひ、日支提携は先づ兩國婦人の親善からといふ確信を得、半信半疑で來た日本を心から信頼する樣になつて歸つて行つたのは、偏へに我國婦人連の力であつて、大成功であつたと斷言して不可はないのである。

そこで今一歩、我國婦人に慾を言つて、是非とも此の上に發憤してやつて貰ひたいと思ふことが有る。それは、あの時の支那婦人連が流暢な日本語で挨拶を述べたといふ新聞記事を見て、日本婦人側から誰かゞ流暢でなくても正しい上品な支那語で之に應待する人があつたら、遠來の彼女達が日本に對し、日本婦人に對する親愛の情を一層深くしたであらうと考へられることである。

今からでも決して遲くはない、日本の教養ある婦人に上品な正しい支那語を覺えて貰ひ、今後益々頻繁となるであらう兩國關係の緊密化に、更に一役買つて貰ひたいのである。

○

明治維新後、我が國文化の黎明期に際してこそ、英語や佛蘭西語は我が國婦人の教養を飾るものであつた。然し今は然らず、既に我が國婦人の研究の對象は西洋から東洋へピントを變へなければならぬ時世になつてゐる。而して日支提携の相手たる支那では、婦人の社會は男では窺ふことも出來ぬ秘密の社會である。此の方面への働きかけと、其の成否とは、大にしては我が對支國策の成否をも決定する。

過日其外交的貢献に試驗濟となつた我國婦人に更に發憤一番を希望するのは、實にこれが爲である。

支那人の殘虐性

今は東京に戻つて、さる大學の敎壇に立ち、持つて生れた溫厚篤實を學生から敬はれてゐる某君と私とは、其の留學時代を同じ北京の屋根の下に棲んでゐたのであるが、當時某君の唯一の希望といふのは、其の君子人といはれる人柄にも似ず、一度でいゝから屠殺をやつて見たいといふことだつた。これは長い外國生活に氣が立つて、血を見ねば納まらないなどといふ譯合のものではなく、唯何となくさうした殺伐なことがやつて見たくなつただけだといふことであつた。すると大陸民族は殘虐性を持つてゐると言ふ彼の平生の主張からしても、大陸生活が長くなるにつれての彼の希望欲求なのだから、益〻以て彼の主張を裏書して「大陸が人を殺伐にする」ことになると、毎時も〳〵さう思つて彼の欲求をきいてゐたことであつた。

或る日、北京の大通り王府井大街を歩いてゐると、一軒の肉屋の前が黑山の樣な人だかりである。何だらうと思つて人混みを分けて覗いてみると、恰度店の前の往來で羊を屠殺してゐる所なのである。

前肢、後肢を二つ宛縛られて轉つてゐる羊の、パチ〳〵とたまげた樣な眼を動かしてゐる傍へ寄つた男が、手にした庖丁で其の頸動脈を切ると、他の男が傷口に壺をあてゝコン〳〵と湧く鮮血を受けてゐる。血が出切つてしまふと、四肢のクルブシの所へ庖丁を入れてそこから肉と皮との間に棍棒をさし入れて、肉と皮とを離す。足のクルブシから入れられた棒の先が、腿や臀や下腹部の皮の下で動いてゐる。その時でも未だ其の羊は、全然死に切つてゐないと見えて眼をパチ〳〵させてゐる。

見てゐると眼まひがしさうだけれども、これを取りかこんだ支那人の群衆は、面白さうに女子供までが、恰度路傍の詰將棋でも見てゐる樣な顏付で見てゐる。「支那人ッて奴は隨分氣の强いもんだ」と思つてフイと向ふ側を見ると、私と反對側の人

混みの中に、にや〳〵とし乍ら、懸命に好奇の眼を見張つてゐる某君の顏が見えた。

支那事變以來支那兵の殘虐ぶりが各方面の話題になつてゐるが、女子供までが牛馬羊豚の屠殺を日常茶飯事として見なれ、さうした鮮血淋漓たる樣にも敢て心を動かさぬ習性を獲得してゐるのだから、日本人の我々が以て忍びずとなす殘虐殘忍の行爲でも、彼等にはほんとの朝飯前なのではあまいかと思ふのである。こゝに兩國人の民性の相違がある。尤もそんな連中と同じ環境に長くゐると、日本人の方が彼等の樣に、殘虐を殘虐とせぬ樣になつてしまふのではないかと、私は考へる。その好い例がわが友某教授である。ひとり殘虐性の問題に限らず、支那人が日本人になるより先に、日本人が支那人に同化されてしまふおそれの方が大きいと私は考へる。それ故、多くの支那通達によつて試みられてゐる、支那人を日本人化する企てよりも先きに、日本人が支那人化しない工夫を、今日に於て確立して置く方が、より緊要で、より賢明な處置であらうと思ふのである。

徐鴻寶氏の逃亡

北京故宮博物院の理事長として現代支那屈指の大碩學として中外に其の名を慕はれて居る徐鴻寶氏が、共產黨員の汚名を冠せられ、其の家を捨てて遠く上海香港へ逃亡して行つたといふ消息程、今次の滿支旅行を通じて筆者の驚愕はなかつた。

日本の地位と眞價とを信ずることに於て、徐氏程立派な親日家はなかつた。其の人が、支那が世界に誇る寶庫博物院の理事長として館長事務を執つて居つたのは、其の無私の人格を、國民政府と雖も認めざるを得なかつたからである。又首都でなくなつて久しかつた北京が、最近まで文化都市として續いて來たのも、徐氏の如き人があつたればこそだとも謂へる。其の事は東方文化事業總委員會を中心に徐氏の庇護指導を受け（滿洲事變の時、徐氏は支那側から國賊だとまで言はれた）た我が

國人が、最もよく知つて居る筈である。

○

其の徐氏が事もあらうに共産黨員として北支を追はれたのである。而も其の眞因が偏へに徐氏の人格高潔と、恒産を有して物欲しがらぬ點と、今一つには日本語を解しない爲とであると言はるゝに至つては、今後の日支提携に就いての我が態度に益〻愼重を要するを思はしめるのである。卽ち事變勃發後支那の各地に輩出してゐる親日家達の蹶起の動機が、多くこれを利用して爲にせんとする者であることは言ふまでもないが、此の徒にとつて、其の私的公的に地位高く學德兼備して大衆の支持を確保されてゐる徐氏の如きは、目の上のコブであつたのである。さうした徒輩と之も利によつて相結んだ在北支文化人と稱する邦人とが、徐氏を放逐したのだと斷じて過言ではあるまい。職業的親日家の如く日本語を解せぬ徐氏にとり、日本側機關に向つて其の寃を雪いで呉れるべき筈の邦人が、自からを放逐する爲に策動をつゞ

けて居るのでは、正に天命是か非かである。

○

玆では便宜上、徐鴻寶氏の事を書いたが、我が對支現地機關にとつての危險は、斯の如く職業的親日家、及び之と結託した邦人利權屋の、爲にする中傷讒謗によつて、眞の親日家(前者が民衆の支持を持たぬに反し斯の人達には民衆の信賴がある)を遠ざけることにある。又、職業的親日家及び利權屋の跳梁によつて、眞の經營の士の出路を塞ぎ易いことにある。殊に自から支那語を解せぬの故を以て、日本語を解する支那人を偏重しつゝあるのは、滿洲國に於ても之を見る所であるが、之が爲に眞の有能の士を逸するが如きことがあつてはならぬ。其の自己の橫車に協力せぬの故を以て、無辜の支那人滿洲人に、みだりに共産黨員の名を冠するの輕擧に與するが如きは、嚴に戒むべきものと信ずる。

ハルビンの中學生

先日上野驛前の某旅館で、折から修學旅行の爲に上京中の哈爾濱日本中學校の四年生五十餘名を中心に、府立某中學教員生徒、並に私立中學教員等との間にさゝやかな座談會が開かれたとき、特に招待されて筆者も亦其の末席をけがした。

もと〳〵哈爾濱を語り、東京を語る、言はば互に自己の住む所を招介すれば足りる座談會であつたが、相當珍問奇答が出て、半すぎ頃からは相當面白い話になつたことである。

其の席で、哈爾濱側の中學生の洩らした慨嘆は、京都大阪を巡つて來た其の途中で、出會つた限りの日本人の殆んど全部が、哈爾濱に對する認識を缺いてゐるといふことにつきた。

「はゝあ、哈爾濱といへば上海の奥でしたな」

等と言はれて、これでも日本人だらうかと思つたといふ彼等の言ひ分は、一應聞いてやらねばならぬ。

○

又、彼等が日頃學校の教師から受ける教育は、相當以上に嚴格な祖國愛教育である由で、さなきだに土地柄、國際的緊迫の空氣の中で、充分に祖國日本を熱愛せざるを得ない環境にある彼等は、其の日常生活の一切を貫き、學校生活の全部を通じて、不斷に忠君愛國の切實な教育を受けてゐるだけに、其の國家觀念や時局認識に於ては、學校を倶樂部と心得てゐる東京の大學生など、遠く及びもつかぬ位の深刻なものを體得し、理解して居るやうに見へた。

まして、同座の東京側中學生を代表したかと思はれる府立某中學の生徒達が、足許にも及ばなかつたのは當然であつた。

其の彼等が、日頃父兄や教師から緊張した生活を強要せられ、

「お前達は此の非常時にぼんやりしてゐるが、内地へ行つて見ろ。内地の人々の戰爭氣分の緊張さは、お前達の想像も出來ない位だぞ」

と激勵叱咤されて居たのが、聞くと見るとは大へんな相違で、内地の人達の何處に非常時的な緊張があるのでせうか――といふのを聞いて、冷汗三斗の思ひがしたのは、蓋し一人の筆者のみではなかつた筈である。

○

所がこれに答へて某私立中學の教師が、事を弓にたとへ、弦を四六時中張つて置いては弓が駄目になる。故に弦は平生はゆるめて置くべきだ。諸君が東京市民の緊張を缺いてゐるといふのも、要するに、弦をゆるめてあるのを見てゐるにすぎぬ――と事もなげに言つて呉れた。

此の教師の言葉は、過日政府の偉い人が言つた言葉の受け賣りにしか過ぎないのであるが、殘念ながら、之を以て哈爾濱日本中學生を納得させることは出來なかつた樣である。

如何にも弓は四六時中張つて置くものではない。しかし精神の問題をも、それと同樣だとして簡單に片付け得られるであらうか。忠君愛國の緊張を解いて、之を不忠賣國に驅らせてよいと其の教師は言ひ得るか如何か。

筆者は東京側に屬し乍ら、哈爾濱中學生の舌鋒にかゝつて敗退してゆく味方の樣を、寧ろ快く眺めて居つたことである。

第二世と其の親

東京に來てゐるアメリカ第二世の教育に携はつてゐる或る知人の話に、

「同じ日本人を兩親に持つてゐても、アメリカ生れの第二世と、ハワイ生れの第二世とでは、祖國に對する考へ方が全然ちがつてゐる」

との事で、例へば今次の支那事變に對する考へ方でも、ハワイ生れの第二世だと、殆んど日本人同樣の認識を持ち、日本の正義、日本の使命等に就いては肯綮するに足るだけの議論を吐いてゐるが、アメリカ生れの第二世になると、全くのアメリカ人で、支那事變に就いても、第三者か乃至は支那人的な考へ方より出來ず、之を如何に日本人としての思考にまで導いてゆくかと言ふことに就いて、非常に苦勞してゐるといふことであつた。

所が、支那や滿洲で第二世の教育に從事した者の話によると、支那や滿洲では本國に於けるよりも、寧ろさうした日本人的な訓練が効果的に行へるといふのである。これは要するに、滿洲や支那では、祖國日本の國力が非常な勢で浸潤して行つてゐるし、日本の文化の高さが支那や滿洲のそれに比べて如何に高いかといふことが、誰の眼にでも判然としてゐる爲であるらしいとのことであつた。之を換言すれば、アメリカの第二世は日本人としての自覺や誇りを喪失してしまふし、滿洲や支那の第二世は日本人としての自覺や誇りを、より熾烈にするといふことなのである。生活程度の高いアメリカから、低い父母の國に來て、アメリカの方を高く評價して日本人として劣等感を持つ前者の氣持にも、反對に日本に生れた者の忝けなさを痛感する後者の氣持にも、畢竟するに虚僞はないであらう。所で其の何れが幸福な第二世かといふと、矢張り後者の方が幸福であらうと私は考へるのである。

之が第二世ならぬ出稼人の場合になると、劣等感にあきらめ切り、態も振も構は

ず低い生活に甘んじた往年のアメリカへの出稼人と、自からは高い生活と日本人としての誇りを持しつゝ而も低い生活の支那人と競爭して行かねばならぬ滿洲、支那への出稼人とを比較すると、其の難易といふか、成敗といふかは明らかであらう。古來アメリカ出稼人に成功者が多く、滿支出稼人に其の反對の者の多かつたのは、一にこれが爲である。

海外出稼人が日本人的士魂を把持して而も大成功を收めることは寔に望ましい。しかし精神と物質との兩立が望めないときに、問題が起るのである。日本人の血の流れたユダヤ人をこしらへるよりも、貧しくてもいい日本人らしい出稼人の多い方がよいと自分は考へてゐる。けれ共さう考へながら、嘗て旅順や大連や、天津や北京や上海で見た夥しい乞食の群――ロシア人でよかつたが――若しや日本人だつたら如何であらうと思ふのである。尤も日本人らしい人間なら、そんな醜骸を異國の空にさらす以前に、短刀かナイフの御厄介になつてゐるであらうが。

或る客人のはなし

「貴君は滿洲國の官吏であり乍ら、どうして滿洲國の國策を內部から破壞する樣なことをなさるのですか――と言つて斷乎として受けつけませんでした」

と、客はその時の事を思ひ出したと見えて、昂奮に双頰を紅潮させ乍らさう言つた。

客といふのは、今春法學部を出て、滿洲の中央銀行に就職し、ハルビン分行で爲替管理の仕事をしてゐるK――君なのである。

其の時といふのは、K――君が今の仕事をやる樣になつて間もない頃、ハルビン駐在の某國の總領事館から、本國からウヰスキーを輸入したいから許可して呉れといふ申請書が出た。これを受付けたK――君は、直に「却下然るべし」との上申書をつけて上司に廻附した所、上司の意見もそれと同じであつたと見えて、それが却

下になつた。

すると、前のと同じ申請書が再び提出されたので、不思議に思つてゐると、新京の某官廳からと稱して電話がかゝつて來た。そして、

「某國の總領事館からウキスキー輸入の申請書が出てゐる筈だが、あれは外交關係も考慮に入れて何とか……」

認可せよ――とは言はなかつたが、殆んどそれに近い話だつたので、K――君は、青年客氣の勇で、それを拒絶すると共に、却つて相手をたしなめて置いたといふのである。そして

「先生、私はいけなかつたでせうか」

といふのである。

「いけないものか。それでいいのだよ、それで……」

K――君の話をきゝながら、私はいつかポロ〳〵涙を流して居つた。

東北の産であるK――君は、三年間を通じて終始私の授業を聞きに出た學生の一人で、才氣渙發といふでもなく、素朴な而も、支那語を學ぶよりもその東北辯からして直してかゝらねばならぬ底の人であつた。そのK――君が、渡滿半年にして早くも三等通譯の試驗に通り、その上に（滿洲で滿語がしやべれたつて特殊技能とは言へぬ、英語かロシヤ語をやれ）といつた私の言葉に據る――と稱して、ロシヤ語の勉强をはげんでゐる……といつた種類の話を嬉しく聞かなかつたのではない。けれ共私はK――君の、このウキスキー一件に、すつかり成人した舊の敎へ兒を發見した。そして隨處爲主……の態度を限りなく嬉しく思つた。

私かに考へるに、青年のよさは自己の正義を守つて飽まで勇敢な所にあつて、權力や金力との妥協にあるのではない。徒らなる圭角は、これを淡白に捨て去らねばならぬことは勿論ながら、讓るべからざる限度だけは、毅然として守り終せる人でありたい。私は毎も毎も學生諸君にこれを說いたことであるが、それを身を以て註

釋して呉れたK――君を其處に見たのである。これが喜ばずに置かれようか。

私は決して自分が擔當してゐる支那語を辱めようとするのではない。がしかし、言語は畢竟、自分の教養なり識見なり抱負なりを發表するの道具にしか過ぎない。法律を學んだ者が法律を知らず、經濟を修めた者が經濟を解せぬ樣なことが有つたら、たとひ支那語は支那人同樣に話せても、百點はやれぬぞとも、私は言つて來たし、また今も言つてゐる。要は人物である。といつて英雄豪傑でないと人物と言へない等とは考へない。現にK――君の如きは二十八歳の青年中の人物であり、寡くとも在ハルビン邦人中の人物だと考へたい。そして愈々切磋、全滿洲の、全東亞の人物になつて貰ひたいものだと考へつゝも、私は敢てそれを口にしなかつた。

先考を土に送つて、八時に上野につき、十一時東京發で歸滿するといふK――君が、忙しい時間を上野驛から駈けつけて來てくれた心情を思ひ、あれを思ひこれを思ひ、故知らぬ涙をポロ〳〵こぼし乍らも、私は去つて行つた彼の、凍てた土を踏む靴音が、全く聞へなくなるまで玄關につゝ立つてゐた。

今年もあと僅に二旬、年内にはもうこんな種類の話を聞き、それをきゝ乍ら涙を流すといふやうなことはあるまいと思ふ。

大陸經營の人材

今度久し振りに滿洲や支那を旅行して、其處に働いてゐる秀れた先輩達に會ひ、ハツラツたる活躍振りを見、透徹した所論を訊いて來たことは、私にとつては近來にない大きな收穫であつた。

滿洲支那を通じて、大臣や參議や總長や總裁やと言はれる人達に會つて、今後の我が青年指導に對しての注言を、と言つて訊くと、この人々は一人の例外もなしに私に註文した。曰く、

「大陸經營の人材を作つて下さい、今の儘の敎育ではいけませんよ」と。

○

昔は學校敎育を受ける者は、受ける方も受けさせる方も、當人の立身出世を第一の眼目として居ればよかつた。官界に入つては如何にすれば位階勳等が昇るか、實業界に入つては如何にすれば昇給するか、を第一義として居ても、昔はそれで許されて居つた。しかし今はしからず。特に滿洲支那の大陸に雄飛せんとして、大陸の官廳や公司に勤めようとするものが、如上の自己の榮達を眼目として居る限り、遂に「我が徒ではない」と、先輩達は一齊に言ふのである。

○

直言すれば、勤人根性や出稼人根性を持つた人間は、遂に大陸經營の資格を持たぬといふのにあつた。そこで私は、或る先輩に尋ねた。

「從來の大陸進出者の多くが持つた勤人根性、出稼人根性のいけないことは判つた。然らば今後大陸に志す者には、どんな根性が要求されるか、念の爲に聞いて置きたいものだが」

と。すると、その先輩は殆ど憫笑に近い苦笑を漏しながら、それでも、

「要は、自分に與へられた役所なり會社なりの仕事を、今迄の勤人の樣に自分の榮達の爲に良く辨理するのではなく、又役所や會社の發展や利益のために努力するのでもなく、與へられた仕事それ自身が、既に日本の發展、東亞の興亡に係りがあるといふ考へ方を持つて來ることだと思ふんだよ」

と答へて呉れた。

○

全く、自分の仕事が、祖國日本の、乃至は東亞の興亡にかゝつて居るといふ自覺、自負、自惚……何れであつても、それを持つことは男兒として何といふ本懷事であり、欣快事であらうかと私は思ふ。

教員も學生も、政治家も實業家も、農民も勞働者も、自分の一擧一動の盡くが、全てこれ君國の盛衰と東亞の興亡にかゝつてゐるといふことを考へたら、日本人は單り大陸經營の國民たるのみならず、實に世界經營の大民族と化るであらう。

○

現にこの私にしても、一等旅客で、大官要人を相手に東亞の大勢を論じつゞけた二ヶ月の旅を通じて、やつと先輩が要求する「自分の云爲は君國の將來につながるものなり」てう自負を養ひ得、それこそ本當に日本の大陸國策を脊負つて立つ大先輩達に傲然と相對し、日本の青年教育は一手に引受けた位の不遜の言辭を弄して來た。現地でそれを言ふ時の私の心には、毫末の嘘も誇張もなかつた、と今も信じて居るのに、歸國二ヶ月、また元の小市民に、小教員に、小記者に還元されてゐる自分自身を發見し、慄然としてゐるのである。

「自己の仕事が君國の發展、東亞の興亡につながつてゐるといふ自覺を持て」

嗚呼、言の何ぞ易き。しかし、此の言を、行に置きかへられる日まで、我が國は大陸經營の士の乏しきを歎きつゞけねばならぬ。而もそれは、之を讀まれる學生諸君の責ではなくて、之を書いてゐる私自からの責任である。